

タイトル	関連性評定質的分析による逐語録研究：その基本的な考え方と分析の実際
著者	葛西，俊治
引用	札幌学院大学人文学会紀要 = Journal of the Society of Humanities, 83: 61-100
発行日	2008-03
URL	http://hdl.handle.net/10742/458

関連性評定質的分析による逐語録研究 — その基本的な考え方と分析の実際 —

葛 西 俊 治

要 約

逐語録研究のための関連性評定質的分析 (KH 法) という新たな質的研究アプローチが、その理論的検討と実践的技法とともに提起された。KH 法は、以下に示す三つの方法を採用して結びつけたものである。すなわち、1) 逐語録の内容をラベルとして要約することによって構造化する方法である、文化人類学者の川喜多二郎による KJ 法、2) KJ 法によって得られたラベルの対応表から多次元尺度構造を見いだすための林知己夫の数量化理論、3) ラベル構造を表示するハッセ図を算出する長田博泰の形式概念解析プログラム、である。

グラウンデッド・セオリー (GTA) 及び解釈学的現象学的分析 (IPA) と比較した際の KH 法の特徴は次の通りである。1) KH 法は KJ 法を再構成して数量的及び論理的な構造分析を可能とすることによって、逐語録をより適切に解釈できるようにしたこと。2) 複数の逐語録のそれぞれの話者について外的変数が得られるならば、カテゴリカル重回帰・カテゴリカル判別分析である林の数量化理論 (I 類・II 類) を用いて分析可能であるという、質的および数量的分析の統合化を行っていること。3) 逐語録をおおむね文章単位に切り出してカード化し、内容に基づく関連性の評価によってカードグループを構成する。そうしたグループ構成がオートポイエティック (自己組織化的) であることと、抽象度を上げないラベル付与が、GTA/IPA の抽象度の高いコーディング方法とは異なっていること、である。

KJ 法および KH 法の自己組織的な過程と言語相対性仮説の観点から見たその文化的特性、及び、類と種の間をの比喩である提喩を用いるラベル付与過程の重要性についての議論が行われた。

キーワード：質的分析、逐語録、関連性、数量化理論、形式概念解析、オートポイエティック、KJ 法、グラウンデッド・セオリー、解釈学的現象学的分析、提喩、解釈モデル

I. はじめに

臨床心理学的なテーマに関する研究では、面談などによる対話的な場を通じて逐語録といった言語的資料を得て、それを分析対象として研究を進めることが多い。特に事例研究では、対話内容についての逐語録あるいはフィールドノートのメモ書きを前提として吟味が行われる

のが一般的である。こうした言語的資料やプロトコル（言語化された内容に限らず非言語的な事実の記載を含む）あるいは簡単な質問に対する回答内容（以下一括して「言語的資料」と略記）をどのようにして分析あるいは解析していくべきかを考えると、統計学的検定を指向する数量的アプローチを用いるわけにはいかず、いわゆる質的研究アプローチを採用せざるを得ない。そうした質的研究アプローチとしては、従来から用いられている一般的な事例研究や病跡学的研究の他に、例えばアメリカの社会学領域で開拓され国内では看護学領域において適用が進められているグラウンデッド・セオリー（GTA: Grounded Theory Analysis）や、イギリスの健康心理学領域を中心に展開されている解釈学的現象学的分析（IPA: Interpretative Phenomenological Analysis）といったものがあり、それぞれ一定の実績を積み重ねて今日に至っている。特に後者の方法は、イギリスを中心にして博士論文作成が可能なレベルの研究法としても用いられている。ところが、一回の面談によって得られた一回分の逐語録を分析しようとする、GTA や IPA といった方法はそうした要請には必ずしも対応していないことに思い至る。たとえば GTA は「データに基づく理論化」という方向性のために例えば10~20数例程度の事例を研究対象として含んでいなければ妥当な研究とはならないといった理解が浸透しつつあり、一回的な言語資料の分析方法という位置づけにはない。（看護学領域では20-30数例を必要とするという議論があり、木下（2003）¹⁾による修正版 GTA では10-20例という記述も見える。）

また、IPA は分析の基本に解釈学的な位置づけと現象学的な位置づけとをおいていることから、IPA を用いる場合は、方法論に関する哲学的で原理的な議論について備える必要とともに、分析の手法そのものは GTA に類似した技法を組み込んでいるため、GTA と同程度の事例数を前提としていると考えられ、やはり一回的な場面に関する研究法としては難しさがある。このように、言語的資料から一定の理論や、より一般的な理解を構築するための方法として開発されてきた GTA や IPA は、研究結果における何らかの「一般性」を保証するための手だてとして「研究事例の複数性」を方法に取り入れざるを得ないともいえる。

ところで、こうした方法論上の議論とは別に、目の前にある逐語録などの言語的資料をつぶさに眺めていくうちに明らかになってきたことは、理論化や一般的理解という学問的追究に先立って、ある分量の言語的資料をまとめて簡潔な形で「要約すること」が実践の場では極めて重要な作業であるという事実である。要約とは「章などの大要をとりまとめて、短く表現すること」、摘要とは「要点を抜き出して記すこと」、梗概とは「大略、あらまし、あらすじ」、概要とは「あらまし、大要、大略、概略」とされるので（広辞苑）、ここではそれらを単に「要約」と記す。長い時間をかけた聞き取りの内容や、頻回に行われた面談での逐語録などの言語的資料を眺めると、（正しく聞き取られ正しく記録されているならば）語りの内容はそこにどのように存在していることは明らかであるが、心理臨床の事例検討場面などのように、面談を行った者はその内容を要約して「要するに…何々」というように把握してその内容を提示する必要に迫られる。そして、提示される側も、そうした内容を聞き取ることによって「要するに…何々」

として理解していくべきことになる。これは、時間的に加速され短時間での情報処理が求められる現代社会だからなのではなく、本質的に「理解」ということが何らかの形での「要約」と本質的に結びついているからといえる。つまり、状況に応じて、語りの中の本質的で意味のある部分を取り出しそれ以外の部分はさしあたり触れないという言語的情報処理によって、「(要するに) …何々ということですね」とこちらの理解内容を語り手に差し出して確認を求めるといことが、それが顕在的であれ潜在的であれ、理解するということが及びそうした理解についてのコミュニケーションの基本を構成しているからである。

語りの分析を例にとるならば、社会言語学者のW.ラボフ、J.ワレツキー (Labov et al, 1967)²⁾ は、インタビューの中で語られたライフストーリーに、「摘要 abstract」「方向付け orientation」「複雑化する行為 complicationg action」「評価 evaluation」「結果 result または決定 resolution」「集結 coda」という六種類の構成要素を見いだしている (桜井2002)³⁾。これは自らの人生を語るというテーマ設定の中に現れる語りの構造と要素を指摘したものであり、そうした理解図式に基づいていくことによって、ライフストーリーがよりの確に把握され「要約」されることによって、聞き取った相手のライフストーリーはそのような内容のこととして第三者に差し出され伝達されていく。たとえば「摘要」とは語り手がストーリーの入り口でこれから話すストーリーを要約し、「終結」とは語り手を現在の時空へと連れ戻す等々、厳密には「要約」の構造についての「要約」となっているこれらの構成要素によって、一つのライフストーリーはそのように縮約されて伝えられるものとなる。

ところで、解釈学的現象学的分析 IPA というアプローチは、解釈学的であること、現象学的であることをその基本におく方法であり、語られた内容の理解が聞き手の解釈によることを前提とする分析方法である。葛西 (2005)⁴⁾ は現象学的アプローチに基づく竹田青嗣 (2001)⁵⁾ の理解を引用して『…、「認識＝表現関係」においては、「経験 (事実＝事態)」と「経験についての言語的再表象」との間に厳密な「同一性」が成り立つかどうか問題となり、「伝達＝了解関係」では、「言語」によって表現されるはずのことがらと「受語主体」の理解との間の「一致」(＝同一性) が問題となる。…』と捉えた後、『…、もっとも重要なのは、「認識＝表現関係」(発語主体→言語) と、「伝達＝了解関係」(言語→受語主体) のふたつを、「信憑関係」(＝確信成立の構造) として捉えることである』と示している。つまり、「認識＝表現関係」「伝達＝了解関係」のそれぞれを「信憑関係」として捉えなくてはならないほどの隙間があり、そうしたズレないし間隙の存在が基本的前提となっていることになる。

そうした根本的なズレあるいは間隙とは、「要約」という作業にも常につきまわっていて、語られた内容をそのように聞き手が聞き取ったとして行われる「要約」とは、したがって、本質的に回避不能なそうした間隙を飛び越えていくという一つの飛躍といえる。そうした飛躍が正しく着地可能か否かという不安に襲われたならば、追体験が不可能なほどに個別的な事柄であったとしても、そうした事柄を抽象化して一般化することによって、比較的安全な着地を試

みるという選択肢も生まれてくる。そうした観点から眺めるならば、複数の個別事例から一般命題への論理的推論である「帰納」とは、実は、着地点の不安定さを含んだまま一般命題へと飛躍するという点において「要約」ということの一つの形式なのかもしれない。

コンピュータの情報処理能力が高進する現代においても自然文の機械翻訳は未だに不十分なままにであり、要約ということもそれほど十分に行えないという（葛西2005）。使用される語彙が限定され、それによって作成される文章が描き出す世界に一定の枠組みが課せられていればより適切な翻訳や要約が可能であるにしても、比喩論を説く佐藤信夫が指摘するように（佐藤1986）⁶⁾、言葉の意味そのものが文脈や状況の中で比喩的に大きく揺れ動き、必ずしも安定しきることはない「意味の誘導性・意味の弾性」の中にあるのだとしたら、言葉の理解と伝達は常に暫定的な状態に留まらざるを得ない。したがって、「要約」という日常的な営みとその実際とは、言葉の意味の「常識」的な理解と体験内容についての共通理解の可能性とをほぼ唯一の根拠として示された、「理解」への果敢な挑戦として位置づけられるものとなる。なお、ここでいう「常識」とは、理解に必要な様々な前提条件について、日常的には「そのようなこと」すなわちデフォルト値（default value）として潜在的に状況が限定されて措定され、当該社会状況において暫定的に妥当とされる知識のことを指す。

なお、逐語録を一次資料と呼ぶのならば、要約は研究者によってまとめ上げられた二次的な資料となることから、言語的資料に基づく質的研究とは実質的に一次資料そのものの研究ではなく、ある程度の妥当性を確保しながら、一次資料の似姿としての二次資料をどのように構成して提示するかということが研究の実質的内容となる。たとえば、IPA では資料のこうしたレベルの違いを次のように捉えている—「IPA は、対象や出来事そのものに対する客観的な陳述を生み出すことに対してではなく、事物に向けた個人の感覚や理解の仕方に関心を向けている点において現象学的である」⁷⁾。なお、こうした理解は特に解釈学的あるいは現象学的なアプローチに限定される必要はなく、言語的資料に基づく心理学的研究の事実上の姿を示しているものといえる。

さて、本論文で紹介する質的アプローチ KH 法の基本段階の目的は、以下に述べる進め方に基づいて言語的資料を「要約すること」にあり、次いで、前提となるそうした作業に基づいて質的な解析法を適用していくものである。その際、ここでいう要約とは、「経験と言葉による表現」及び「言葉による伝達とその了解」のそれぞれにおける内的間隙の必然性を見据えた上で行われる営みであって、要約の提示とは「言語的資料をそのように理解して、内容の要点を縮約してまとめ上げた一つのモデル」を提示することを意味する。言語的資料からの要約には研究者の観点などに基づく多様性が考えられることから、得られた要約を「要約の一つのモデル」という意味で「要約モデル」と呼ぶことがある。さて、そうした「要約モデル」に基づいて、言語的資料から研究テーマに関する「解釈モデル」の生成へと進み出ることが KH 法の次の段階となる。ここまで「解釈」という言葉をできるだけ避けて議論を進めてきたのは、「要約」

を行うための過程と「解釈」を行うための分析段階を可能な限り分離して、それぞれ異なった方針と手順とによって進められる過程であることを明確にするためである。というのは、「要約」のための作業、すなわち、言語的資料の内容をカード化して内容の似たカード同士が徐々に集まってくる作業を進めていくと次第に気がつくことではあるが、ある程度の段階までは内容の「類似性」によってカードのグループが構成されていくにしても、ある段階にさしかかると、カードグループはすでにそれぞれ内容の異なる独自のものになっているため、「類似性」という概念だけではそれ以上に集約が行えない状態に立ち至る。つまり、それ以上の集約を行うためには、類似性以外の評定基準を導入せざるを得ないという、一つの限界が存在するためである。こうした段階に至ると、そこが「要約」に関する作業の最終段階となる。KH法による基本的分析は、こうした最終段階における「要約モデル」を数量化理論Ⅲ類及び形式概念解析を適用して分析することによって成り立つ。それに引き続く「解釈モデル」の生成段階では、「要約モデル」に示されている最終ラベルを基本単位として、そこに、類似性以外の規準で最終ラベルを互いに結びつけることのできる規準を導入する。すなわち、事柄の因果関係や帰属関係によって成り立つところの「推移性」（たとえば「XなのでY」「XのせいでY」）、あるいは事柄相互が対照されて際だったり連動していることによって見いだされる「連動性」（たとえば「XであることはY」）、そして、事柄の成否に関わる前提条件や付帯的状況などによる「限定性」に関わる理解（たとえば「Xという状況ではY」）、あるいは、「対比性」（たとえば「XなのにY」）などを導入することによって、「要約」された内容を理解するための図式である「解釈モデル」を提起することになる。なお、KH法では、「要約」「解釈」「理論」を明確に分離し、一定の作業過程を経て到達される事柄としていて、それぞれ固有の位置づけにあることに注意されたい。すなわち、a)「要約」とは、「カード布置」の過程を通じて「最終ラベル」を得てくること、b)「解釈」とは、「最終ラベル」として得られた事柄について、それらの相互的關係について何らかの仮説を立てることであり、得られたモデルを「解釈モデル」と呼ぶこと、c)「理論」とは、そうした「解釈」を妥当なものとして主張する理由や根拠や事物の構造を明示する考え方のこと、である。（以下、括弧付きの「要約」「解釈」「理論」はそれぞれこうした操作的方法による事柄であることを指し示す。）

ちなみに、グラウンデッド・セオリーとは“Grounded Theory Analysis on data”とあるように、データに基づく理論（形成）あるいはデータ対話型理論と訳されることもあるが、そこでいう理論とKH法でいうところの「理論」とは意味内容が異なるので特に注意を喚起しておきたい。なお、このようにして得られる「解釈（モデル）」の内的外的妥当性については、あらためて後半の章で吟味することにする。

なお、「要約モデル」や「解釈モデル」とは、いずれも言語的資料についての理解図式を、一つの挑戦として提示するものである。そして、葛西（2005）が示す「モデルの多重併存状態」とは、たとえばそのような要約や解釈として提示される様々な「モデル」によって構成される

ことになる。なお、同一の言語資料であっても、どのような事柄やテーマに関心を抱くかによって多様な要約と解釈が可能であって、ある特定の理解のみが取り出されるという訳にはいかない。しかし、このように述べると、そうした不安定性に対して、「厳密な」数量的アプローチからの批判や非難あるいは不安が質的アプローチに向けられることにもなりかねない。しかし、統計的検定を前提とする数量的アプローチとは、数量的データの数量的処理手続きが厳密なのであって、データをどのように得てくるのかという出発点、そして分析結果をどのように理解し解釈するのかという終点の二つの端点においては、「常識」的な範囲での妥当性しか認められそうにない(葛西2006)⁸⁾。分析対象の属性やカテゴリーの(一般意味論的観点における)不定性、統計的検定における有意性水準の原理的不定性、想定母集団の不安定性および不定性、このいずれをとっても統計的検定を前提とする数量的アプローチには、未だ決着を見ていない原理的な問題がつきまとっているからである。仮に、そうした原理的吟味を欠く数量的アプローチから一方的な批判が向けられたならば、言語的資料の理解を前提として研究を進める質的アプローチ側からは次のような問いかけをすることができる。すなわち、「日常言語を一切用いずに数量的アプローチは成立しうるか否か。また、日常言語を一切用いずに数量的アプローチによる結果を伝達し理解することが可能であるか否か」である。こうした問いに対して適切な回答が与えられるまでは、当然ながら、あらゆる質的アプローチは長期にわたって暫定的な妥当性を奪われないものとなる。なお、この問いの根底には、数量的アプローチという高度に抽象的な思考に至る以前に、3歳頃までの大脳言語処理機能の発達と日常言語の習得、及び、言葉による相互伝達・相互理解体験が行われてきているという発達上の前提があることは言うまでもない。言い換えるならば、数量的アプローチから問題視される、言語理解そのものと言葉の伝達理解に関わる本質的な「不定性」の問題とは、それと同時に、言語理解と相互的伝達の可能性に関わる暫定的な「大域的安定性」の問題と抱き合わせて、常に一対として扱うべきテーマであると主張するものである。言い換えるならば、この論文そのものが、読み手によるよほどの誤読と誤解に見舞われずおおむね相互的に了解されるとき、そこには理解に関する「大域的安定性」が認められるだろうということであって、そのような事実上の「大域的安定性」を、言語理解の原理的な「不定性」の故に一方的に破棄してはならないということである。それは、数量的アプローチにおける原理的問題を指摘することによって、数量的アプローチを全否定している訳ではないことと正しく対をなすものである。以上により、数量的アプローチ、質的アプローチはいずれも全面的に否定されるわけでもなく、また、全面的に肯定されるわけでもないことから、質的分析および数量的分析の方法論の問題は哲学的で原理的な議論から抜け出し、研究対象をどの程度にまでの確に把握できるかという意味での、専門領域内妥当性の判定を前提とする、個々の分析方法の有効性の度合いの吟味へと移行することができる。

Ⅱ. 関連性評定質的分析の実際

本論文はこうした理解に基づいて、最初に「言語的資料のよりの確な要約」を実現するための方法を吟味していくことにする。方針としては、1) 単一の言語的資料であっても適用できる分析方法を提起すること、2) 複数の資料を用いることによる、研究資料の「複数性」を分析方法に適切に取り込むこと、3) そうした新たな分析方法の妥当性についての吟味を行うこと、の三点を念頭におく。本論文で提起する「関連性評定に基づく質的分析 Qualitative Analysis based on Relatedness Evaluation」という質的研究アプローチ（以下、KH法と略記する）では、これら三つの目的を充足する方法論と実際的方法とを整備していくことを目指している。なお、「要約」に関わる部分がKH法の基本段階であるため、最初に「要約モデル」の生成とその分析に関わる手法を中心にして解説する。その後、「解釈モデル」生成に関わる方法を詳述し、次に「解釈モデル」を妥当とするような根拠や構造を示す「理論」ということの位置づけについてもふれていくことにする。

1. 「要約モデル」生成段階における関連性評定質的分析

1) 発想法的 KJ 法から要約的 KH 法への移行

文化人類学者の川喜田二郎は、研究の現場で見聞きし体験した内容をフィールドノートに記載し、その内容をカードに書き写すことでカード化し、次いで、意味的に近いカード同士が近くに寄ってくるようにする中でカード全体の空間配置を得た。そうした空間配置に基づいて、テーマに関わる事柄や要因がどのような関係にあるのかを把握する方法を開発し KJ 法⁹⁾¹⁰⁾と名付けた。この KJ 法は質的アプローチの一つとして言語的資料の分析や逐語録の分析にもしばしば用いられてきているが、逐語録の内容を平明に理解し要約する方法としては難点がある。最も大きな問題は、通常、KJ法とは新たな発想を得るための発想法という位置づけにあり、カード化された記述を読んで理解する中で「新たな観点などを発見する」といった創造性開発技法としての側面が強いことである。それに対して逐語録が得られる面談場面では、面接者側からの一方的理解といったような投影的な理解を避けるためにも、可能であれば必要に応じて対象者に確認することが極めて重要であって、当面は発想よりも事実を重視しなければならない。それが直接的な質問の形をとる場合もあれば、相手の視線や身体的状況などのささやかな事実から推測する場合や語りの前後の文脈から推測する場合も含めて、何がどこまで事実なのかへと向かわねばならない。そのため、KH法は発想法としての位置づけではなく、後に述べる専門領域内妥当性という考え方を一つの手がかりとして、言語的資料をより適切に「要約すること」を主眼としている。以下の論考は、KH法における「要約」の実際的方法とその方法論について吟味するものである。

2) 数量的アプローチ vs 質的アプローチという二分割思考からの脱却

いわゆる数量的アプローチとは、ほとんどの場合、統計的検定を前提とする統計的アプローチを指している。それと対比される質的アプローチとは「数量的ではない」方法とされ、両者は二項対立的な関係にあるとされる。しかし、数量的アプローチには、統計的分析とともに数学的論理的にデータを解析する方法が含まれており、統計的分析が数量的アプローチの全てではない。たとえば、1974年から1986年まで統計数理研究所所長を務めた林知己夫博士による「数量化理論 Quantification theory または Quantification methods」¹¹⁾は、数学的観点に基づき質的データに数量を振り当てるという「数量化」を行う方法であり、Ⅰ類（カテゴリカルデータに基づく重回帰分析）、Ⅱ類（カテゴリカルデータに基づく判別分析）、Ⅲ類（カテゴリカルデータに基づく主成分分析ないし因子分析の方法）、Ⅳ類（多次元尺度構成法的方法）、Ⅴ類、Ⅵ類までが開発されている。この方法は1940年代から1950年代にかけて林博士によって開発された日本独自の方法として知られている。また、心理学では広く用いられている因子分析法（Factor Analysis）や多次元尺度構成法（Multi Dimensional Scaling）も厳密には統計的分析というよりも、むしろデータ構造を空間上に表現するための数理的観点から構成された分析法と考えることができる¹²⁾。したがって、数量的アプローチとは「統計的検定を基本とする統計的分析法」と「数理的分析法」の二つから構成されていることになる。以下に示すように、逐語録を基本的なデータとするKH法は林の数量化理論Ⅲ類・Ⅱ類・Ⅰ類を用いて「質的データの数理的解析」を行うため、数量的アプローチと質的アプローチを合わせもつ統合的アプローチとなっている。この点においてKH法は、もっぱら質的な解析のみに終始するGTAとIPAとは一線を画すアプローチである。

3) 質的データの数学的論理的な「表現」

何らかの対象とその属性を対比する分析方法の中にあって、長田博泰教授による「形式概念解析 Formal Concept Analysis」プログラムは統計的方法でも数量的方法でもなく、対象と属性の対応関係に着目する論理的アプローチによるものであり、両者の関係を半順序構造の「束 lattice」と捉えて表現する手法である。ここでいう「表現 representation」とは、データの「可視化 visualization」とも考えることができるように、複雑な研究対象を容易に理解可能なものとして提示するための数学的論理の変換がその骨子となる。そうした意味では、因子分析法や多次元尺度構成法は数量的データ（相関行列や距離行列）の数理的な空間表現方法という位置づけとなるだろうし、さらにパス解析から共分散構造分析に至る最近の展開を眺めるならば、データの構造を視覚化し表現することの研究上の利点が確かに認められる。つまり、現行の数量的アプローチそのものが、統計的検定を絶対視しその枠内に留まることよりも、データ構造のより良い理解に向けた「表現」方法に一定の価値をおくものと考えられる。（なお、因子分析は相関行列のベクトル空間的表現であるのに対して、共分散構造分析における確証的因子分析については、空間的に表現されたデータモデルと実測値との対応の判定に際して統計学的側

面をあわせもつ。）

KH法では、林の数量化理論Ⅲ類の適用に続いて長田の形式概念分析法¹³⁾¹⁴⁾¹⁵⁾を用いて、逐語録から得てきた質的データ（カード化された記述とラベルとの対応表）を数学的論理的に「表現する」ことによって、言語的資料をよりの確な理解するための手がかりが得られることを目指している。先行するGTAやIPAにおける質的分析結果がもつばら文字によるリスト的記述と図解による表示に留まっているのに対して、KH法では川喜田二郎によるKJ法を基本として、そこに林知己夫による数量化理論、そして長田博泰による形式概念解析ソフトという、いずれも日本国内で開発ないし展開された「表現」に関わる方法を導入することによって、質的アプローチにフォーマルな部分を組み込むことを試みている。したがって、KH法の本質的な部分とは、言語的資料の適切な要約という目的に沿って、数量化理論Ⅲ類及び形式概念解析という「表現」的分析方法が適用できるように、言語的資料にどのように取り組みどのようにして質的データを得てくるのかにはじまり、「言語的資料のカード化」「カード布置」「カードグループへのラベル付け」という一連の手順に方法論上の吟味と実際的な配慮を加えている点にあるといえるだろう。さて、以下に要約モデル生成に関わるKH法の四つの局面について簡略的に示しておくことにする。

第1局面「カード布置」

「カード布置」という術語によって、1a) 逐語録などの言語的資料のカード化、1b) カードの意味内容に基づいてグループが構成されること、1c) グループへのラベル付与、以上の三つの過程を含む段階を指すとともに、そのような段階におけるカードやカードグループやラベル付与の状態を指すことにする。

逐語録の例として「質的研究法についての印象」をテーマにして、実際の分析過程を例示することにする。すなわち——「えーと、一言で言えば難しいということかな。簡単ではないと思う。自分はどうもついていけないような感じです。それでも、まあ、使えるといいなあとには思う。また、質的アプローチは実際に役に立つのかどうかもよく分からないです。有効性についてもどうなっているのか…。もちろん、それなりに有効なので使われているのでしょし、意味があるから発展しているはずだとは思いますが、実際に習うべきなのかどうか悩みます。」

1a) 回答の「カード化」

こうした言語的資料から意味的にひとまとまりと考えられる部分ごとに取り出してカードに記す。基本は一つの文が一枚のカードに書かれるものであるが、意味的に異なるところで分割することもある。また、数行にわたる内容が全体としてひとまとまりとして扱うべきときは、数行にわたるようなかなり長い記述が一枚のカードに書かれる場合もある。カード化の実際的な方法は聞きとりの内容やテーマによっても異なり様々な場合が想定されるので、研究テーマにふさわしいカード化の過程や基準を選択しその内容を明記しておくべきである。

1b) カードの内容に基づくグループ構成

カードに書かれた内容の近いもの同士がそばにより集まってくるようにして、内容の類似したカードが一つのグループを構成する過程であり、後に示すように理想的には「カード内容の類似性に基づく、カードの自己組織的なグループ生成」という考え方で行われる。

1c) カードグループへのラベル付け

ラベルは単語による見出しではなく、グループに含まれているカードの内容を要約して作成する。ラベルは1～2行程度の長さの文章とし、グループの中のカードの意味内容を取り合わせて作成する。カテゴリーやサブカテゴリーといったような抽象的で概念的なラベル作成は行わない。また、カード内の評価的あるいは情感的な記述を捨て去らないように気をつける。

- 1 難しい。
- 2 簡単ではない。
- 3 ついていけない。
- 4 使えるといいな。
- 5 役に立つのかな？
- 6 有効か？
- 7 意味があるから発展しているはずだが
- 8 習うべきか？

図1. カード化の例

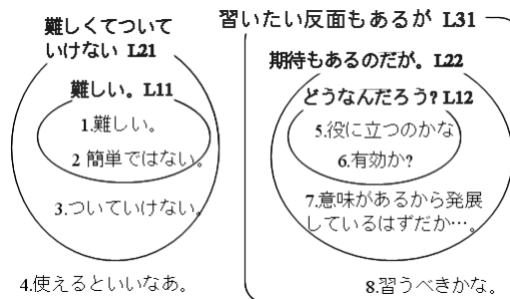


図2. 「空間配置」「カード布置」の例

(L11, L21, L12, L22, L31はグループに付与されたラベル)

	L11	L21	L32	L12	L22	L31	val
1	1.00	1.00	.00	.00	.00	.00	
2	1.00	1.00	.00	.00	.00	.00	
3	.00	1.00	.00	.00	.00	.00	
4	.00	.00	1.00	.00	.00	.00	
5	.00	.00	.00	1.00	1.00	1.00	
6	.00	.00	.00	1.00	1.00	1.00	
7	.00	.00	.00	.00	1.00	1.00	
8	.00	.00	.00	.00	.00	1.00	
9	

図3. 「カード布置」に基づいて作成された8枚のカードと6個のラベルとの対応表。
[1] となっているところはカードとラベルに対応があり、[0] は対応がないことを示す。

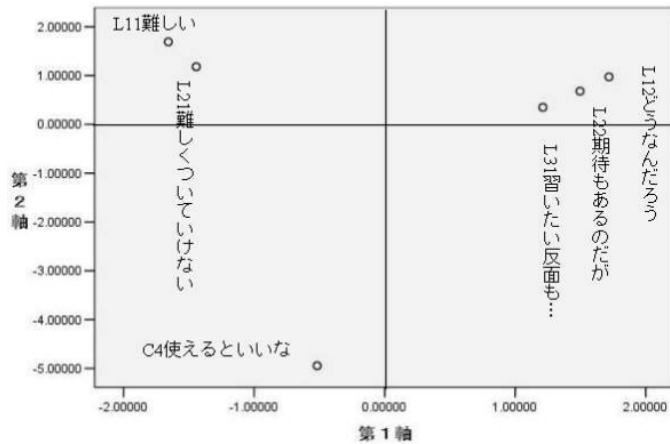


図4. 「カードとラベルの対応表」を数量化理論Ⅲ類によって分析して描画。
横軸が第一軸、縦軸が第二軸として表示。

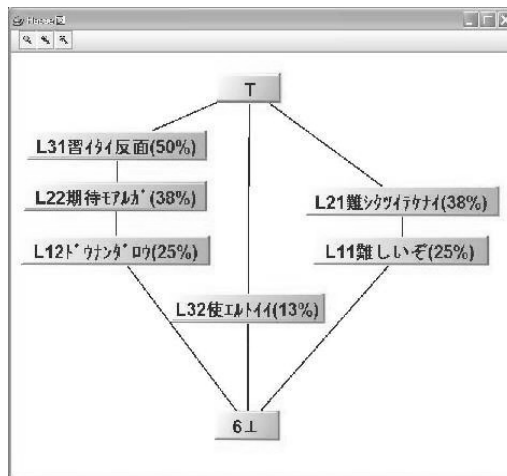


図5. 「カードとラベルの対応表」を形式概念解析によって分析して描画。
%表示は、そのラベルに含まれるカード枚数を示す。

第2局面「カード布置を数理的に変換して空間的に表現する」

カード布置に現れるカードとラベルとの対応表を質的入力データとして用いて、2a) 数量化理論Ⅲ類によって分析して要因間に複数次元の軸構造を見いだすこと、2b) 同じ対応表を形式概念解析によって分析して Hasse 図表現を得ること、の二つの分析を含む。なお、この段階では、形式概念解析による分析は「カード布置」の状態をもっぱら描画することを目的としている。(複数対象者、複数研究者によるカード布置の総合化に際して有用となる。)

第3局面「言語的資料の量・内容に基づいて適切な分析形態を選択する」

一人の対象者からひとまとまりの言語的資料のみを研究対象とするのか、それとも、テーマについて複数の対象者から言語的資料を得ているのか、あるいは、言語資料から「カード布置」を得てくる際に複数の研究者による評定が行われているのかなど、資料の形態や研究者側の条件によって、後に示す第一形式から第四形式までの研究形態の中から適切な研究方針を選択すること、あるいは研究テーマに関する「解釈モデル」を提起するために必要な条件や内容を吟味する段階でもある。(本来は研究方針を検討する研究設計の段階で行う。)

第4局面「ラベルと外的変数との対応関係の数量的分析」

4a) 複数の対象者から言語的資料が得られ、最終的に複数の対象者全体についての「カード布置」が得られたときには、特定の対象者があるラベルに該当する発言を行ったか否かに注目することによって、全対象者と全ラベルとの対応表(対象者とラベルとの対応表)を作成することができる。そして、4b) 対象者の属性や特徴(年齢、性別などの個人情報や様々な調査・測定項目)といったデータが得られていれば、4c) それらの属性などを「外的基準変数」とし、カード布置におけるラベルを「説明変数」として、数量化Ⅰ類(質的重回帰分析)あるいは数量化Ⅱ類(質的判別分析)を実施することができる。これによって、ある特定のラベルで指し示されている内容の発言を行った者で行わなかった者の間で、外的基準変数にどのような差違や影響があるのかを数量的に分析することができる。

具体的には、「カード布置」におけるそれぞれのラベルに注目し、それぞれのラベルに該当する発言を個々の対象者が行っていたかいなかったかの二値{0,1}データを、各対象者毎に新たな変数として追加しておく。次に、各ラベルへの該当の有無と、対象者の属性や他の測定項目や変数との関係を数量化理論Ⅰ類またはⅡ類によって分析する。例えば、心理検査Xなどで各対象者について $X=123.45$ などといった数値が分かっていたとき、そうした外的基準変数が例えば、カードグループのラベルについて、「イ) 何々は好まない=1」「ロ) 何々することがある=1」「ハ) 何々だったらよいと思う=1」(各対象者によるそうした記述の有無をそれぞれ{1,0}とする)などの事柄と、数量的にどのような対応関係にあるかについては、カテゴリカルデータについての重回帰と呼ばれる数量化理論Ⅰ類によって分析する。また、外的基準変数となる性格検査Xが数値(比例尺度)ではなく、名義尺度上の分類あるいは3件法のような順序尺度上の数値{1,2,3}などとして得られている場合は、カテゴリカルデータについての判別分析と呼ばれる数量化理論Ⅱ類によって同様に分析する。それによって、言語的資料に見いだされたある特定の内容の発言や記述が、対象者に関する様々な測定項目と対比されて数量的な解析結果が得られるので、「要約に関する関連性評定質的分析」は、この状況では質的分析と数量的分析との統合を可能にするアプローチとなっている。

第5局面「解釈モデルの生成」

KH法では基本的に第1局面と第2局面を行うことになるが、その後、研究の分岐点である第3局面において、第4局面の数量的分析へ向かうのか、あるいは第5局面として位置づけている解釈モデルの生成へと向かうのかを選択することができる。KH法でいう「解釈モデル」とは、葛西（2005）の「モデルの多重併存状態」を構成するモデル群であり、「カード布置」における「最終ラベル」として取り出された事柄を基本にして、現象や事柄を理解し了解するための仮説を提起することによって構成される。なお、「カード布置」という第1局面では、カードの意味内容の類似性のみに基づいてカードのグループが構成されるのに対して、「解釈」段階では、後に示すような様々な「関連性」規準が用いられる。

2. 研究形態の単数性・複数性

GTAやIPAなどでは、研究者本人だけではなく、他の研究者などによる複数者による判断とともに複数（人）のデータを用いることも重視していて、こうした姿勢をトライアングレーション（triangulation）すなわち「三角測量」と呼んで方法上の要諦としている。これは常識的な見方とも考えられるけれども、質的アプローチの極限的な研究型式である「単独者からの単一資料に基づく、単独研究者による研究」は、トライアングレーションという見方とは両立せず、方法論的には排除されることにもなりかねない。これまで、研究の単数性・複数性という考え方はそれほど議論されてきていないようであるが、本論文ではKH法の実際応用に関連して以下のように明確に分離する。

研究の単数性あるいは単数的研究とは、「単独の研究者」「単独の資料」「単独の対象者」といったように、「一人」「一つ」「一人」という単数によって研究が行われることを指す。その極限的な例が「一人の研究者が、ある一人を対象として、たった一つの資料に基づいて行う」研究である。記述を簡潔にするために、こうした研究形態を第一型式と呼ぶ。次に、「一人の研究者が、ある一人を対象として、複数の資料に基づいて行う研究」を第二型式と呼び、「複数の研究者が、ある一人を対象として、一つの資料に基づいて行う研究」を第三型式と呼び、そして、「複数の対象者から複数の資料を得て行う研究」を第四型式と呼ぶことにする。いずれの研究形態もKH法の基本段階である「カード布置」の第一局面と「質的データの表現」の第二局面を踏まえているが、研究事態の「複数性」の状況に基づいて次のように研究を進めることができる。

1) 基本的な研究形態

第一型式

- 「一人の研究者が、ある一人を対象として、一つの言語的資料に基づいて行う」研究形態
- ・カード化された言語資料の関連性評定

- ・「カードとラベルの対応表」を入力データとする林の数量化理論Ⅲ類による分析と長田の形式概念解析による分析
- ・状況に応じて「仮説」「解釈モデル」、そして「理論」の提起

第二型式

- 「一人の研究者が、ある一人を対象として、〈複数の言語的資料〉に基づいて行う」研究形態
- ・カード化された複数の言語資料について、単独者による関連性評定
 - ・個々の評定結果についての「カードとラベルの対応表」の数量化Ⅲ類による分析と、個々の評定結果についての対応表の形式概念解析
 - ・複数資料からのすべての「上位ラベル」（最終ラベル）を対象とする第二次関連性評定
 - ・第二次関連性評定に関する対応表の数量化Ⅲ類による分析
 - ・第二次関連性評定に関する対応表の形式概念解析

第三型式

- 「〈複数の研究者〉が、ある一人を対象として、一つの言語的資料に基づいて行う」研究形態
- ・単一言語資料のカード化と、カード化された資料に対する複数者による関連性評定
 - ・個々の評定者による評定結果についての数量化Ⅲ類による分析と、個々の評定者による評定結果についての形式概念解析
 - ・個々の評定者による評定結果に基づく、対象カード間「距離行列」の作成
 - ・複数者による「距離行列」から「平均距離行列」の作成
 - ・「平均距離行列」に関する多次元尺度法による次元構造の分析
 - ・複数の評定者によるすべてのラベルリストを用いた形式概念解析

第四形式

- 「一人の研究者が、〈複数者から得られた複数の言語的資料〉に基づいて行う」研究形態
- ・カード化された複数の言語資料について、単独者による関連性評定
 - ・個々の評定結果についての「カードとラベルの対応表」の数量化Ⅲ類による分析と、個々の評定結果についての対応表の形式概念解析
 - ・複数資料からのすべての「上位ラベル」（最終ラベル）を対象とする第二次関連性評定
 - ・第二次関連性評定に関する対応表の数量化Ⅲ類による分析
 - ・第二次関連性評定に関する対応表の形式概念解析

通常の研究形態として多いのは第四形式と思われるので若干の説明を加えておく。複数の人を対象として「あるテーマについての聞きとり」を行うことで、同一テーマについての複数の

資料が得られる。カード化からカード布置に至る過程において、対象者一人から得られるカード枚数がそれほど多くなければ、複数の対象者個人毎に分析を進めるまでもないことが考えられる。たとえば、あるテーマについて一言二言答えてもらうような設問の場合は対象者一人からせいぜい数個の文章が得られる程度となるだろう。そうした場合は、それらを全て含んだ全員分のカードを元カードとして「カード布置」を行っていくことが考えられ、実質的に第二形式の研究形態に準ずることになる。したがって、第四形式は、対象者一人からある程度の分量の聞きとりを行った場合の研究形態であり、あらかじめ、対象者個人毎に「カード布置」を実施し、その後、各対象者のカード布置における「上位ラベル」あるいは「最終ラベル」のみをすくい出し、それらを全員分合わせたラベルカードを対象として、あらためて「カード布置」（第二次「カード布置」と呼ぶ）を行い、続いて数量化Ⅲ類と形式概念解析によって分析していくことになる。なお、第一形式から第四形式まで、「仮説」「解釈モデル」および「理論」の提起は、状況に応じて実施していくことになる。

2) 時間的経過を含む複数資料の分析について

言語的資料が複数ある場合の対応については、すでに第二形式および第四形式として分析手順を示してきたが、それ以外の資料構成としてよく見られるのは、時間的順序に沿って得られる場合である。聞き取りが複数回行われることにより、過去のある時点から最近の時点までにわたって時間軸上に資料が順序づけられている場合と、聞き取りそのものはたとえば一度しか行われぬが質問事項が過去のある時点からの時間的推移や変化などについての聞き取りとなっている場合とがある。また、結果的にたまたま時間的推移の中での変化についての語りとなっている場合もある。こうした時間的推移に特に関心を持たず、あるテーマに関わる事柄や要因などに注目する場合はすでに述べたような方法によって対応することができるが、時間的推移に伴って語りの内容がどのように変化しているのかに関心をもつ場合はそうした時間的位置づけを含んで分析を進めていく必要が生じる。

時間的推移に伴って得られた複数の資料なのか、それとも、単一の資料の中に時間的推移が含まれているのかによって分析の進め方にも相違があるが、ここでは、後者の資料についても、時間軸に沿って複数の資料が得られた場合に準じる方法を示す。まず、時間軸にそって得られた n 個の資料をそれぞれ $t_1, t_2, \sim t_n$ と名前をつけて識別する。なお、後者の単一資料については、語りの内容に基づいて資料を時間的に異なるいくつかの部分に分割することにして、それらを順に $t_1, t_2, \sim t_n$ として扱うことにするが、そうした分割の基準については明記しておく必要があることは言うまでもない。

KH法における最も標準的な分析手順は、資料 $t_1 \sim t_n$ について、それぞれ個別に「カード布置」を行っていくもので、 n 個の資料それぞれについて第一形式による分析を行うものである。これによって、各時点での語りの内容について得られた「カード布置」に基づいて、それぞれ

n個の「数量化理論Ⅲ類」および「形式概念解析」による分析結果が得られることになる。なお、n個ある「カード布置」の間の推移関係は、研究者による解釈という側面が強いため、「解釈モデル」の提示として行う必要がある。なお、必要があれば、n個の「カード布置」それぞれの「最終ラベル」を取り出し、それらすべてのラベルを用いて「(第二次) 関連性評定」を行う。つまり、ここからは複数個の資料についての分析手順である「第二形式」研究形態へと移行することになる。そして、第二次「カード布置」において得られる第二次「最終ラベル」について、数量化Ⅲ類による分析と形式概念解析による分析を行う。

なお、時間的区別のあるデータを形式概念解析によって分析してその内容把握を目指すことについては、すでに長田(2007)¹⁵⁾によって示されている。まずは各時点での形式概念解析による結果を得て対比してみると、各時点のハッセ図内のグラフから一部分を抜き取って各時点についての部分束を表示することによって時間的に異なる内容を対比して研究することも可能となっている。

Ⅱ. 逐語録のカード化とカード布置そしてラベル付け

逐語録の内容を適宜切り出して「カード化」していく過程は、KJ法での一般的な方法と大差なく、意味が明確にとれる範囲で文章を切り出してカードに記載していくことになる。文章単位での切り出しが普通であるが、いくつかの文章が一まとまりで一つの考えを表現している場合は、文章単位に限定する必要はなく複数の文章が含まれていても良い。また、極めて短い文章の場合は、誤解を避ける意味で、前後の文章から適宜抜き書きを追加するなどして一枚のカードを構成することもある。こうした切り出しの基準については、それぞれのテーマに由来する状況や条件を考慮して各研究者が適宜選択し、判断基準を明記すべきことはすでに述べた。

意味内容が似通ったカードが、互いに呼び合うようにそばに寄り集まるといったカードの移動や集積のプロセスが、「要約モデル」生成段階のKH法でも最も重要な作業となる。というのは、このプロセスの内容に、GTAやIPAとは異なる次のような独自の観点が盛り込まれているからである。

1. カードの自己組織的なグループ生成

自己組織化および自己組織的という言葉¹⁶⁾は、生命システムのあり方に関わるオートポイエシス (autopoiesis) およびオートポイエティック (autopoietic) という概念を指し示すものとされる。それらを、「カード全体が自ずとカードのグループ化を創生する」といった事柄を表すのに適切な概念として援用し、KH法の根幹に関わる次の二点を明確化しておきたい。すなわち、a) 研究者による投影的な「カード分類」を避けること、b) カードのグループに付与されるラベルの抽象度を過度に上げないでおくこと、である。この二つの方針はいずれも、

「研究者」という行為者によって「カード」という対象物が操作されるという他動詞的な作業に付きまとう次のような問題を回避するためのものである。たとえば、初心の段階でKH法を実施しようとする時、カード全体やカードの一部を何らかの概念に基づいて分割してしまうという罠が待ち受けていて、たとえば「良い・どちらでもない・悪い」とか「発展的である・発展的ではない」などのように分類してしまうことが起きる。こうした「分類」行為は「カードをグループ化する」という他動詞的な表現をそのまま実施しているのに過ぎないのであるが、KH法ではそうした方向は採らない。また、カードのグループが構成されていく方針については、KJ法においても「内容の似たカードが互いに呼び合う」などのように表現していて、頭ごなしにカードの分類を行うものとはなっていない。そうした過程は、たぶん「似た内容のカードが互いに呼び合い、自ずとグループが構成されていく」という自動詞的な表現が最も適切なものと思われる。KH法はKJ法のそうした考え方を取り入れているのであるが、通常は「カードのグループ化」という言い方で表現されてしまう難点を乗り越えるために、次のような定式化を行う。すなわち——「カードのグループが構成されていく過程とは、内容の似たカードが互いに寄り集まって結びつき合い自己組織的に構成されていく過程」であり、「比喩的な意味でのオートポイエティック過程」として定義する。

川喜田二郎がKJ法を展開していた頃にオートポイエシスという概念が知られていれば、そうした理解をただちに言及した可能性が考えられるにしても、発想法的なKJ法から要約的なKH法への移行に際して、カードの自己組織的なグループ構成という立場はKH法の根幹を成すものとしてあらためて明記しておく。

この点を強調するにはいくつかの理由がある。一つは、1970年に川喜田二郎による移動大学に参加してKJ法の訓練を受けて以来、すでに述べたような「カードのグループ化」の過程において、カード全体がある概念でいくつかの部分に分割されてしまっている例がKJ法図解に散見される状況を憂慮してきたこと。また、そうした傾向は、近年、質的研究法の一つとしてKJ法の実習指導を行う際にも頻繁に見られ、かつ、そうした問題点を指摘しても理解されないばかりか、カードの分割的なグループ構成というやり方から容易に脱却できない例が多々あったことが挙げられる。もちろん、カードが集まりいくつかのグループを構成していくという過程は、実際には「私」が意味内容の似たカードを見つけ出してそばに寄せていくという主体的作業であるから、念頭におくべき「自己組織化」といった自動詞的な「理念」に対して、対象操作的な実際の「作業」との間に根本的な食い違いがあることは言うまでもない。このような事態に陥る理由の一端を以下に示してKH法の根幹にある「自己組織的なグループ構成」が必ずしも容易ではない事情を明らかにしておきたい。

端緒は、KJ法に関わる文献や資料の中に、欧米ではKJ法は理解されにくいといった趣旨の記述に何度か遭遇したことにある。個人主義的であり自我が明確に位置づけられている欧米という文化圏では、「私（I, Ich, Je, Я…）」という主体が自らの価値観に基づいて思考し判断

するという点において、判断主体がある一定の理解の元にカード全体を「分割・分類」という行為に至ることは容易に想像される。それに対して、精神疾患の現象学的把握を試みる木村敏が「…『語る主体』が『私』、『ぼく』、『おれ』などの多数の代名詞等価語で——そのつどの対人的状況に全面的に依存して——語りわけられ、しかも多くの場合にこれを省略することのできる日本語を母国語として育った人とは、いわゆる『自我』に関する理解は全く異なったものとなるだろう」（木村敏，1981，p.318引用）¹⁷⁾という指摘や、日本人を「甘え」という依存性の観点から捉え、主体的な判断よりも周りの人々の反応に敏感である日本人の精神構造（土居健郎，1971）¹⁸⁾から考えても、KJ法がカード全体を主体的に分割するというトップダウン的方法ではなかったことは、日本の言語的文化的状況と密接に関わっているだろう。

言語から精神構造や行為へのこうした影響については、E.サピアとB.L.ウォーフによる「言語相対性仮説」¹⁹⁾，すなわち、認識のあり方は言語によって規定されるという理解へと結びつくにしても、質的アプローチとしてのKH法へ及んでくる実際的な問題点は、トップダウン的なグループ構成では、カードが「分類」されてしまうことによって、分類基準に無関係で個別的な内容が大幅に無視されてしまうこと、および、そうしたグループに付けられるラベルの抽象度が極端に高くなる傾向にあること、である。また、カードのグループに抽象度の高いラベルが付けられることによって、そのグループに所属する実際のカード群とは意味的には異なる事柄までもが指し示されることによって、語りがもつ個別的で独得な意味内容が見捨てられがちになることが大きな問題となる。

ところで、KJ法およびKH法では極めて重要である「類似性」の判断そのものが、西洋と東洋では根本的に異っていることをアメリカの心理学者R.E.ニスベット（2004）²⁰⁾が指摘している。原題「思考の地理学 The Geography of Thought」の第六章「世界は名詞の集まりか、動詞の集まりか」の中で、「…もし、西洋人がいつもカテゴリーにもとづいて世界を体系化しているとするれば、西洋人の類似性知覚（対象物どうしがどの程度似ているのかの判断）は、対象物がどの程度同じ規則にもとづいて分類できるかで決まるはずである。もし、東アジア人にとってはカテゴリーがさほど重要でないなら、東アジア人の類似性知覚は、対象物の間の『家族的類似性』によって影響されやすいと考えられる。」と述べ、刺激対象をどのグループを入れるかといった実験において両者の間で分類結果が明確に異なっていることを指摘している（同上，p161-162）。なお、この「家族的類似性」については訳注として次のように書かれている——「哲学者ヴィトゲンシュタインが提起した概念。すべての対象に共通の特性があるのではなくさまざまな類似性が重なり合い、交差して、全体としてゆるい類縁関係を結んでいる状態を指す」とある。なお、近年の認知言語学的理解によれば、人間が認識しているカテゴリーは論理的な条件によって定義されたものではなく、典型事例とそれとの類似性によって特徴づけられるという「プロトタイプの」なカテゴリーとして考えられている。すると、カードが相互に寄り集まるのは「情念」によると川喜田二郎が述べたとき、そこにはカード間の「家

族的類似性」という意味での類似性を感じとっていたとも考えられる。

なお、動作主体とその対象物という対比について、英語表現では「導管のメタファー the conduit metaphor」と呼ばれる比喩的表現が陳述の70%を占めるという指摘²¹⁾があり、そうした傾向は、操作対象に対する行為主体からの他動詞的関わりを強めていると考えられる。例として、“get the idea across”, “put these concepts into...”といった表現では、対象となるものがある所へと（あたかも管を通すが如く）導いていくという比喩によって事態が表現され、事物を導いていく主体としての「I」とともに動作対象とが明確に対比されている。そうした表現に全面的に依拠するならば、「自己組織的なグループ構成」という自動詞的な発想そのものが困難であることは容易に想像される。しばしば日本的とみなされる「自らを空しくして…」という態度によって、一枚一枚カードを丁寧に読みながらそれぞれのカードの「土の香り」が残るように意味的に近いカードが自然に近寄って行って…というボトムアップ的な過程は、かえって主体性のない方法として忌避されるのかも知れない。

なお、英語では再帰代名詞 oneself を付加することで他動詞的意識のまま自動詞表現を実現し、たとえばロシア語では動詞語尾に自己への再帰性を示す *себя* を付加することで直ちに自動詞となる。なお、北海道方言には「泣かさる」という言い方で我知らず泣いてしまうといった事態を表す自発動詞という表現があるので、内容の似たカードが互いに「集まらさる」、すなわち「自ずとそのように集まっていってしまう」という自発動詞表現が可能である。

2. 抽象度を上げないラベル付け

オートポイエティックな過程である自己組織化を KH 法の基本とすることによって、内容の類似したカードが相互に寄り集まってくることが実現されるならば、集まってきたカードは相互に意味内容の似たものとなるから、そのグループの内容を表示するために付与されるラベルは、カードの個別的内容を反映するためにそれほど抽象度が上がらないことが予想される。それに対して、GTA や IPA ではコード化 (coding) と呼ぶ過程において、対象となる記述に比較的抽象度の高い言葉や概念を付与することを基本としている。一方、KH 法では、そうした抽象度の高いラベルは分類志向的な意識から生まれることをその理由として避けるとともに、後に示すように、KH 法の第 4 局面となる、外的基準変数に基づく数量的分析が可能な研究形態においては、ラベルに記される個別的内容で具体的な表現が分析結果の理解に大きな意味をもつことがあるという実際的な理由からも、抽象度の高いラベル付けを避けている。具体的には、単語のみのラベルや文節だけからなるような短いラベルは避けて、1～2行程度の長さの文章としてラベルを作成する。このように、カードグループの内容をある程度の長さで記述することによって、内容の個別性と具体性を維持することを試みる。また、KH 法におけるラベル付は、ある程度の長さの文章の中に、価値表示的な記述、たとえば「好きだ」「困った」「うまくいかなかった」などを取り込むことによって、抽象的なカテゴリーへ陥らないようにしている。

ここで、抽象度の高低に関わる言語学的理解の一つとして「提喩 synecdoche」をとり上げ、抽象度が高い概念や表現をあえてラベルに使わない理由の一端を示す。比喩の様々な形式の中には、グループとそのグループに属す個別事例に関わる比喩表現があり、それが「類」と「種」に関わる提喩と呼ばれるものである。たとえば、「人はパンのみにて生きるものにあらず」という例においては、個別の食べ物の「種」である「パン」という言葉によって上位概念である〈食べ物〉という「類」を指し示し、その逆に、「お花見に向かう」の「花」という類によって実際には〈桜〉という個別の種類を指し示すなど、抽象的な上位概念と個別的事例とが相手を指し示すという比喩形式である。なお、欧米では提喩を換喩の一種とみなす傾向が強いようであるが、ここでは、佐藤および瀬戸(2003)²²⁾に基づき、提喩を換喩とは異なる独自の比喩形式として扱っている。なお、換喩 (metonymy) とは、対象に関連のある外在的な部分や事柄に注目してそうした部分によって対象そのものを指し示す比喩形式であり、相撲取りを「チョンマゲ」と呼んだり、油揚げの入っている蕎麦を「キツネ (蕎麦)」と呼ぶのがその一例である。

比喩的認識を詳述する佐藤信夫²³⁾は、「類と種」に関わる提喩の解説にあたって、(お前は誰だと問われて)「自分は人間だ」と答える漱石の作品を例として紹介している。どのような職業や年齢や経歴の人であっても「人間」という類に属すだろうから、自らを「人間である」と名乗ることは論理的には正しい。しかし、そのように大きな類を持ち出してしまうことによって、本来は知りたい氏名や住所や職業などの個別的属性がすべて棚上げされてしまうので困る。KH法における「カード布置」段階ではあくまでも的確な要約を行うことを主眼としていることから、このように抽象度の高い類概念を用いることによって個性や具体性が失われることを警戒する。もちろん、内容の異なった複数のカードにラベルを付けようとするならば、それなりに抽象度が上がることは避けることはできないが、KH法ではそうした抽象度の上がり方に対して慎重な態度をとる。

例えば、二枚のカードから成るグループがあり、「Card1ここではジャガイモなどを作っています」「Card2この地域ではトウモロコシも植えている」という記述内容だったとする。そのグループを表すラベルに「野菜」という「類」を用いることで、GTAなどでは「野菜を作っている／野菜栽培」などというラベル (コーディング) にもなりそうである。それに対して、KH法ではそうした類表現による抽象化は避けるとともに、カードにある実際の表現を援用して、「Label-1-1このあたりではジャガイモやトウモロコシなどを作っている」というように、足して二で割るような表現を好む (Label-1-1とは最初の段階 Label-1の最初のラベル-1であることを表示)。ここで、「ジャガイモ」「トウモロコシ」を「野菜」と言い換えず、そうした類表現へと抽象度を上げてしまわないのは、「ジャガイモ」「トウモロコシ」と個別事例を記すだけでも、「野菜」という「類」を提喩的に指し示して暗示することができるという比喩論的理解に基づいているからである。また、カード布置の早い段階ですぐに抽象度を上げて敢えて「野菜」と言い換える必要性もないと考える。さらに、仮に「野菜」とラベル付けしてしまったな

らば、面接対象者がたとえば「ゴーヤ」「サトウキビ」とは言っておらず北の大地でとれそうな「ジャガイモ」「トウモロコシ」と述べているという、潜在的で個別性の高い情報が失われることにもなりかねない。特に心理臨床の現場では、些細な言葉遣いや言い回しなどに重要な手がかりが含まれている可能性もあるため、ただちに「野菜」といった上位概念によって言い換えをすべきか否かについては敏感でなければならない。なお、あらためて発想をして仮に「北の野菜栽培」などとすると一見良さそうにも思えるが、「北の…」ということ語り手が意識していたのかが不明なまま、研究者側の視点から一方的に「北」ということに焦点を合わせて明示的に言い換えるのは、一つの理解の仕方ではあるが「要約」の基本には背いているだろう。なお、提喩表現では、たとえば野菜という「類」とジャガイモなどの「種」といった相互関係は日常的な知識構造の一部として安定しているため、華麗な発想が可能である換喩や隠喩と比べてみるとレトリカルな表現という雰囲気はあまりなく、いわば省略的な例示や列挙によって類を指示する構造になっているため、個別事例をそのままラベルに用いて提喩的に表すことには大きな支障はないといえる。

さて、同じ提喩であってもこれとは逆方向の提喩的理解、すなわち、ラベル付けに際して「類」概念を特定の「種」概念へとあわせて結びつけてしまうという、「類」から「種」への言い換えにも問題が潜んでいる。たとえば、面談対象者が「学校は嫌いです」と発言したとき、一般意味論的な視点なりあるいは面接の専門家によるならば〈…どの学校のことだろう。今通っている学校のことだろうか〉あるいは〈学校へ行くのが嫌いなのか、勉強が嫌いなのか、それとも担任とかクラスの仲間が嫌いなのか…〉等々、言葉の意味を明確にしていく必要性を感じるとるに違いない。たとえば「学校」というのが実際には何々小学校という個別の学校のこと（類から種への提喩）なのか、学校教育制度一般の話（種から類への提喩）なのかは、言葉の提喩性のゆえに判断がつかないからである。そのように明確化がなされていない状況で、たとえば〈今通っている学校が嫌いなのだ〉といったような一方的な判断を下すことは、「学校」という「類」表現を特定の提喩的「種」（個別事例）へと独断的に結びつけてしまうことになる。このように、提喩的理解ということが自覚なしに行われる可能性があることから、「類」と「種」が不用意に言い換えられて元の記述の真の意味が失われてしまう危険性を考えて、語り手の言葉遣いや表現方法を可能な限りそのまま用いてラベル作成することを重視するのである。なお、〈同級生が問題なのかもしれない〉とするならば、これは提喩的表現ではなく、「学校」は無意識のうちに〈同級生〉を指し示す換喩表現として理解されたことになる。（こうした提喩的あるいは換喩的認識については葛西（2005）を参照のこと。）

- * 以上の議論を踏まえて、「カード布置」におけるグループ化の低い段階（1段階目から2、3段階目くらい）では、抽象的なラベルを考案するよりも、カードに記載されている実際の言葉と表現をそのまま援用して、足して二で割って合成したような文章（列挙的提喩表

示)をラベルとする方が効果的であることが多い(ただし類似性規準から逸脱しないこと)。また、そのようにすると段階が進むに連れてラベルの記述が短くなるのではなく逆に長くなることがあるが、経験的にはその方がラベル作成も容易であり時間的負担も少ない。なお、長すぎるラベルは、「カード布置」の全体像が見えてきてからあらためて見直すことで適切な長さに収めていくことは比較的容易である。

- * 数量化理論Ⅲ類は「カードとラベル」の対応表、すなわち全カードが第1列に縦に並び、全ラベルが第1行に横に並んだ形の行列データを分析対象とする。すなわち、カードとラベルに対応があるときは $\{1\}$ それ以外は $\{0\}$ となる $\{0,1\}$ のデータ行列について、データが $\{1\}$ であるマス目が対角線的に並ぶときに、行および列のそれぞれにおいて、内容の近い者同士がそばに位置しているという考え方に基づいて、そうした状態を数学的に解析することによって軸上にラベル(またはカード)を配置する手法である。相関行列を分析して軸を析出する因子分析とは固有値計算を行う点では同一であるが、ラベルそのものに二項対比的で一次元的な内容(たとえば「疲れている・元気」=〈疲労度〉など)の記述が少ない場合、各軸を一つ概念に基づいて一次元的に解釈するのは必ずしも容易ではない。そうした場合でも軸の解釈を効果的に進めるためには、数量化Ⅲ類に先立って、カード群に付与されるラベルの記述ができるだけ明確であるとともに、ラベルの内容が極度に抽象的で没価値的であったり非評価的な記述に陥ることを避けなければならない。つまり、KH法においてⅢ類を援用するのは、数量化を行うことだけが目的なのではなく、ラベルの記述に一層的確さが要求されるという、質的アプローチの「質の向上」という意図がある。もちろん、その前提として、研究テーマに即した的確な聞きとりが行われていなければならない。

3. 「カード布置」と最終ラベル

KH法の「カード布置」段階におけるラベル付けでは、元のカードが何枚か集まって構成される最初のグループに対しては、Lable-1-Xという位置づけのラベルを付与する(これを1段階目のカードグループと呼ぶことがある)。次に、そうしたグループがいくつか集まったり、あるいはまだどこにも所属しないカード(独立カードと呼ぶ)が集まるなどして構成される次のグループに対するラベルは、2段階目のグループを意味してLable-2という位置づけ(2段階目のカードグループ)とする。以下、Label-3～Lable-5などと推移するが、おおむね1時間から1時間半程度の聞き取りの場合、カード枚数は100-150枚程度となることが多く、KH法によって構成されるグループは高々4段階～5段階程度のものとなることが多い。

自己組織的に構成される元カードのグループ数は、テーマや聞き取りの時間数などによって大幅に左右されるにしても、「カード布置」の最終段階では、理想的には 7 ± 2 程度の個数になると理解しやすいことが多いので一つの目安となる。(人間の情報処理能力に関する初期の

情報理論的研究の中で、チャンクという情報の縮約を用いなければ、適切に認識できるカテゴリ数の上限が 7 ± 2 個程度となることが報告²⁴⁾されているため、そうした示唆を援用している。) もちろん、聞きとりの仕方や聞きとるテーマの曖昧さの度合いによっては極めて多種多様な応答が返されることも稀ではない。そうした場合でも、経験的には多くても15程度以内になると「カード布置」の全体像がつかみやすく見やすいものとなる。

なお、カード布置の最終段階では、抽象度が高くてLabel-5やそれ以上にもなるグループ、そうした高い段階まで至らない低い段階に留まるグループ、どこにも属さない独立カードという一枚だけの「グループ」が残っている場合がある。なお、一枚だけの「グループ」であっても内容的に独立しているのであれば他のグループに無理に吸収させる必要はなく、一枚で一つのグループを構成すると考える。このように、最終段階まで残っているカードグループ（独立カードも含む）のラベルを「カード布置」における「最終ラベル」と呼ぶ。なお、「カード布置」に現れた全てのラベル（独立カードも含む）は、KH法の第二局面である「数量化理論Ⅲ類および形式概念解析による分析」のため、「カードとラベルとの対応表」を作成するために用いられる。

ところで、KH法における「カード布置」は、理念的には「カードの自己組織的なグループ生成」によって進められるものと考えているが、研究者側の実際の内的作業としては、複数のカードを見比べて、カードに書かれた内容について相互の関連性を見通していくことから成り立っている。そうした観点からは、「カード布置」に関わる作業は、実質的には研究者による「カード相互の関連性についての内的評定」という内容となる。この点については、まず「関連性評定」という言葉が示唆する「評定作業」に関する問題について吟味を加え、続いて関連性評定の「本質的不定性」と「大域的安定性」、そして関連性評定の「領域限定的妥当性」及び「専門領域内妥当性」について検討していくことにする。

Ⅲ. 記述内容についての関連性の評定について

1. 類似度評定作業の限界

カードに記された内容を相互に見比べて、一対のカードについて両者の内容の類似度（あるいは距離）の評定を求めるという研究方法は、多次元尺度構成法の入力データを得る方法として一般的なものである。たとえば、PAC分析（Analysis of Personal Attitude Construct：内藤，1997）²⁵⁾、または「個人別態度構造分析」という方法は、研究テーマに関連する言語連想をあらかじめ対象者から得て、その中から選び出したいくつかの項目についての類似度の評定を対象者に求める。そのようにして得られた距離行列をクラスター分析によって分析して、その結果を対象者に提示して反応を得ることによって研究を進めていくという独特な手法であり、質的アプローチと数量的アプローチを結びつけた内容となっている。特に、聞き取りの質を高め

るために数量的分析の結果を対象者に提示するという関わりが興味深い。ところで、このアプローチでは、クラスター分析のどの手法を用いるのかという選択に関わる問題が残されているにしても、それ以上に、研究対象とするカード枚数が増えると組み合わせの数が増大するため、実質的に扱えるカード枚数、つまり、実際に検討できる連想内容の個数に制約があることが研究上の限界となる。仮に10枚のカードについて類似度評定を求めると、10枚から2枚を取り出す組み合わせ（以下、 $C(10,2)$ と表記する）として45対についての評定が必要である。また、カードが15枚になると、 $C(15,2)=105$ 対と増大するため、評定に時間がかかるだけでなく、対比のために同じカードをそれぞれ14回見比べる必要があるために、単純な作業の中で精神的疲労も増大してくる。なお、こうした難点を乗り越えるために、類似度評定の代わりに事例の選好順位を得ることによってただちに分析結果を出力して提示できるコンジョイント分析を用いたアプローチ（山崎菜穂, 2005）²⁶⁾がある。

いずれにしても、逐語録の分析などの場面においてそれほど長くはない資料をカード化したとして、仮に数十枚から百枚程度のカードになるとしたら、例えばカード枚数が30枚ならば $C(30,2)=435$ 対であり、カード枚数が100枚ならば $C(100,2)=4950$ 対となるから、一対比較法によって行うことは事実上ほとんど不可能といえる。仮にそうしたことが可能ならば、得られた評定結果を入力データとして用いて多次元尺度構成法(MDS: Multi Dimensional Scaling)などによって即座に分析できるのだが、実現の可能性は極めて低い。そのため、カード化された言語的資料を評定するという作業を実現するためには、総当たりの一対比較法ではない方法を探し出さなくてはならない。

その点において、KH法の基礎となるKJ法では数百枚にもなる膨大なカードが対象だったとしても、作業時間はそれなりにかかりながらも「空間配置」という作業を進めていくことができる。その理由は、一枚のカードを他の数百枚のカードと逐一比較するという作業を行わないことによる。カードの内容をあらかじめ全体的に読み通しておくことによって、相互に類似度の高いカードのみを扱い、似たような内容のカードがあるとそれらは互いにそばに置かれ、内容が似ていないカードとあえて逐一対比したりしない。

さて、ここであらためて大きな問題となってくるのはカードの類似性を評定する過程において「似ている」と判断する基準はどのようなものなのか、である。川喜田二郎の初期の著作（川喜田, 1960）²⁷⁾に次のような記述がある——。「2. 全部の紙きれを一順して熟読せよ。3. やがて、親近感をおぼえる紙きれ同志が集まってくる（実際には集めるのだが、集まってくるという感じ）。表面の類似性、たとえば、何かの共通の語で集めるな。リクツより情念で集めよ。4. グループ内の紙きれが4～5枚になったら、それ以上多くならないように注意せよ。一匹オオカミはそのまま。」その後を示されKJ法の説明でもほとんどこうした抽象的な記述に終始していて、KJ法の最も本質的な評定基準については、「情念で…」といったような謎めいた言葉に基づいて考えるほか方法がない。欧米でKJ法が理解されない理由の一端も頷ける

ところでもあるが、KJ法そのものの有効性は日本国内での長年の実践の中ですでに確認済みのことである。いずれにしてもKJ法におけるそうした「情念」について、すでに述べた西洋と東洋の類似度認識の違いについてなど、そうした基本的な理解を進めておく必要があることは言うまでもない。

2. 意味および関連性評定の不定性と大域的安定性

言葉の意味は常に揺れ動き安定しきることがないことは言語学的基本理解といえる。そのため、自然言語のコンピュータによる機械翻訳には困難がつきまとい、常識的で一般的な意味での表現も完璧に翻訳される段階には至っていないと言われている。（テーマや語彙などが一定の範囲に限定される場合は除く。）こうした、意味の多様性と不定性に由来する、語りの意味内容の解釈の多様性と不定性とが喧伝される結果、言葉で語られた事柄には信頼性がないとされ、科学的実証的な研究対象からは排除されてきたといえる。実際、二つカードに書かれた内容がどのように関連しているかを評定するという作業にしても、それぞれの内容をどのように理解するかが多様であるために、関連性についての評定も多様であり、原理的に不定であると言わざるを得ない。まずは、こうした多様性と不定性をどのように理解すべきかについて、ここでは創造性に関する研究の中から示唆を得ることとする。

1) 創造性に関する等価変換理論の意味

工学において特許を取得した発明を研究する中で、市川亀久彌（1977）²⁸⁾は、常識的には異なる二つの事柄に何らかの共通性を見いだすことによって新たな発想が生まれることを発見して、そのようにして創造的研究が行われることから創造性に関する「等価変換理論」という考え方を発表した。たとえば、昭和初期、ボイラーの燃焼効率を高めることを思案していた田熊常吉翁が、燃焼効率の高いボイラーを発案する際に、人体の動脈系静脈系の血液循環とボイラーの水流循環との「等価性」に気づくことで発明に結びついたなどの例を挙げて創造的発想の基本構造を示している。

日常的理解	創造的理解
$A \neq B$	$A \stackrel{\varepsilon}{\equiv} B$

たとえば、一般的には関連がないと思われる「事柄A」と「事柄B」があるとして、それらは日常的理解としては「 $A \neq B$ 」と表記される。ところで、事柄AとBについて熟慮していくと、ある不思議な次元 ε という了解方法を思いつき、その次元上では事柄AとBとが「等価」であると気がついたとして、これを「 $\varepsilon(A \equiv B)$ 」と書くことにする。ここで「等価」とは物事の「同一性」を見いだすことでもあるので、まさに事柄AとBとを「同定する identify」こととなる。歴史上、最も影響力があった「等価性」「同定」は、たぶん、数字「1」の発見だったかもしれない。大人も子ども「一（人）」であり、犬も猫も「一（匹）」であり、海や山や川や地球や星が全ての事物が「一」という数字で表すこと

ができるからである。数量的アプローチとは、この数字「1」の魔力を最大限に用いるものであり、例えばそれぞれに特異な人生を歩んできた異なった人であっても、ありとあらゆる属性を無視してそれぞれ数字「1」によって抽象化して一人の人間として「等値」とすることができるからである。

等価変換理論の立場から眺めるならば、日常的な理解では関係のなさそうな二つの事柄の間に新たな関係を見いだすことによって創造的発見が行われるのであるから、常識的には隔たっている二つの事柄であっても、それらを結びつける未発見の関係性が存在しているのではないかと推測することができる。もし仮に、この推測を破棄することができるような原理が見いだされなかったとするならば、驚くべきことに、等価変換理論に基づいて、意味の多様性と不定性について次のように憶測することができる。すなわち、a) 未発見の関係性が発見されることによって創造的研究が行われるのであれば、それと同時に、b) そこにはすでに発見されている既知の関係性があらかじめ想定されていなくてはならない、ということである。つまり、創造的発見という「未知」への飛躍とは、その前提として、すでに一定の理解や知識が得られていて他者あるいは社会的に了解されそれなりに安定して存在することによって初めて可能となるからである。これは直ちに「物事の意味の大域的安定性」と「物事の意味の本質的不定性と多様性」との対比を介して、「言葉の意味の大域的安定性」と「言葉の意味の本質的不定性あるいは多様性」という対比を指し示すことになるだろう。つまり、創造的な発見についての等価変換理論は、それ自身が意図することなく、「日常的であり（創造的ではない）当たり前の世界」を前提とせざるを得ないからである。

日常的理解	自明性の崩壊
$A \equiv B$	$A \neq B$
	ϵ

A. シュッツに代表される現象学的社会学の立場では、個々人にとっての「自明な世界 the taken-for-granted world」²⁹⁾をその基本におき、あらためて社会ということを考察していく。たとえば、その自明性が内的に崩壊する統合失調症などの状況では、仮に「自己の個別化の原理の障害」(木村敏, 1990)³⁰⁾

がその本質であるならば、「自己が自己であること」の基本構造が揺らぎ失われる過程においては、そこでの体験が創造的か否かはともかくとして、日常の飽和した理解を明らかに逸脱した発想や体験を経ていくことになる。なお、図では、 ϵ というある特異な次元から眺めることによって、「事柄A \equiv 事柄B」という日常的な等価性が失われる結果、日常的な自明性が崩壊して、「 $\epsilon(A \neq B)$ 」と表記される事態へと至る。そして、対象を知覚する自分という存在そのものが融け出してしまうならば、認識対象の全域にわたって物事の定位が混乱に陥る事態となる。また、S.フロイトによる精神分析が説く、社会適応的な「二次過程」に対抗するところの原初的な「一次過程」とは、内的で「創造的な」世界というS.アリエティ³¹⁾の見方に立てば、そこは夢の中で見られるような異様な事物や非論理的な展開に満ちている世界であり、狂気と創造性の紙一重の世界である。そうした精神病理学、深層心理学の世界における「意味

の本質的不定性と多様性」を「自明性の崩壊」として図示するならば、実はその前提として、日常的理解という「意味の大域的安定性」を想定せざるを得ないことを見落とすわけにはいかないといえる。

2) 関連性評定の「大域的安定性」の確認

以上の観点から眺めるならば、二つの事柄が見方によっては「無関係である」ことから「密接に結びついている」ということまで、原理的にはさまざまなあり方を取り得ることが必然となる。したがって、カードを相互に見比べて「関連性」の「評定」を行っていく KH 法においても、あるカード対の関連性がゼロから100までの数値をとる測度だったとして、まさしくゼロ～100までの幅をもつほどに不定であることが原理的に考えられる。しかし、長年、KJ 法における「カードの空間配置」の過程に身を置いてみると、評定者の間で位置づけが異なる特異的なカードが散見されるのと同時に、「カード布置」が全体的に見ると極めて似通ったものになることもありふれた事実である。それぞれの評定者の経歴などが相互に異なっている場合には評定が異なることが多いのと同時に、評定者の背景に共通部分が多い場合には、評定全体がそれほど大差ないものに落ち着くことも一つの必然とも感じられる。たとえば、発達ないし児童心理学などの研究領域では、乳幼児や児童の行動を撮影あるいは観察してその内容を複数の評定者によって評定することによって数量的なデータとすることがある。あるいは、動物の行動を研究する動物生態学などでも同様に、観察した内容を研究者の判断で評定値へと置き換える形でデータを数量化することがある。こうした研究形態では、「複数評定者間の評定結果の相関」を算出するとそれなりに高い数値が得られることが多く、本論文で吟味しているところの「大域的安定性」が相関係数の高さによって暫定的に確認されたとして以後の分析が進められていく。つまり、研究内容の「大域的安定性」とともに原理的な意味での「理解内容の暫定性」を前提とするならば、極限的な意味での「真実」を研究するという位置づけではない形で研究を実際的に進めていくことができる。すなわち、絶対的な不可知論といった思考に陥っているのではなく、研究結果の暫定性を許容しながら実情についての知見を積み重ねることに意義を見いだしているといえる。なお、統計的検定を方法とする数量的アプローチも、葛西（2006）が指摘しているように、方法上の暫定性の上に行われていることを再度確認すべきであろう。

結論的には、大域的安定性の有無や研究結果の真偽といった二値的な判定が問題となっているのではなく、具体的にどの程度の妥当性を認めることができるのかという妥当性の「度合い」が問題なのであって、それを操作的あるいは技術的に確認するための方法を確立することが重要課題といえる。なお、こうした議論に関わりあらためて確認すべき点としては、関連性評定の評定内容の「大域的安定性」の問題は、さしあたり、後に示すところの「状況限定的妥当性」と「専門領域内妥当性」という2種類の「内的妥当性」に限って主張しているなのであって、そ

れによって「外的妥当性」の問題が自動的に解決されたと主張しているわけではない。

また、関連性評定とは専門領域に近い研究者や評定者の間では類似した結果となると考えられるのであって、領域やテーマが異なれば、同一の資料であったとしても評定内容は当然異なるものとなる。例えば、聞きとりの中に「花が枯れていて、見てみると花瓶の水がなくなっていた」「スリッパが片方見あたらない」といった事柄が含まれていたとき、「カード布置」の何段階目かになって「Label 花が枯れていたりスリッパが片方見つからないなど、困ったことがあって…」というように一つのグループに二枚のカードが集まってきたとしたら、それはどういう意味でそうなったと考えられるだろうか。対象者の年齢などの状況と評定者の専門分野や経験内容によっては、例えばアルツハイマー病や認知失調症に関わる事柄として理解される場合もあれば、家庭内の親子などのメンバー間での不穏な動きとして把握されたり、あるいは、部外者の侵入といった刑事事件とみなされるかもしれない。このように、関連性評定に基づく「要約」ということが、「状況限定的」でかつ「ある専門領域内」にて行われる場合に限って、そうした状況を前提して「大域的安定性」の存在を原理的に認めるべきであると主張するものである。これは、数量的アプローチに対して、現象の数量的抽象化による理解を原理的に認めることと軌を一にすることといえよう。

3) カードのグループ分けにおける「大域的安定性」の判定

逐語録から n 枚のカードが得られたとする。KH 法では、その n 枚のカードが相互の意味上の関連性によっていくつかのグループへと集約されていくから、最初の段階にのみ注目して、 n 枚のカードがどのようにいくつかのグループに分かれたかを調べて、評定者 A と評定者 B とでカードの分割状態の一致度あるいは相違度を比較してみることができる。さて、 n 枚のカードがどのように分割されるかを考えると、それは「 n 個ある要素の集合を、互いに重複せず、網羅的で、かつ空でない部分集合に分割する分け方の数」である「第 2 種の Stirling 数」となることが知られている。カードが仮に 4 枚しかない場合、分割数が一つの場合は $S(4,1) = 1$ 種類、(すなわち、 $\{1234\}$)、分割数が二つの場合は $S(4,2) = 7$ 種類、(すなわち、 $\{1\} \{2,3,4\}$ 、 $\{2\} \{1,3,4\}$ 、 $\{3\} \{1,2,4\}$ 、 $\{4\} \{1,2,3\}$ 、 $\{1,2\} \{3,4\}$ 、 $\{1,3\} \{2,4\}$ 、 $\{1,4\} \{2,3\}$)、分割数が三つの場合は $S(4,3) = 6$ 種類、($\{1\} \{2\} \{34\}$ 、 $\{1\} \{3\} \{24\}$ 、 $\{1\} \{4\} \{23\}$ 、 $\{2\} \{3\} \{14\}$ 、 $\{2\} \{4\} \{13\}$ 、 $\{3\} \{4\} \{12\}$)、そして分割数が四つの場合は $S(4,4) = 1$ 種類 (すなわち、 $\{1\} \{2\} \{3\} \{4\}$) となる。そして、そうした分割数の合計は、カードが 4 枚の場合は 15 通りあることが Bell 数として計算される。

評定者 A による分割パターンと評定者 B による分割パターンとが何か所かで異なる場合、カードの入れ替えを何回行うことによって相互に移行できるかを調べ上げるならば、そうした入れ替え回数に関わるパターンを数え上げることで確率分布を構成することができるから、評定者 A による分割パターンと評定者 B による分割パターンの類似性に関する確率分布を計算

することが考えられる。経験的には、100枚程度の枚数のカードを複数の評定者がそれぞれに「カード布置」をして作成したそれぞれの分割パターンは、たとえば10枚程度も変わらない類似したものが得られることも多いので、厳密な数え上げに基づく確率計算を行えば、評定者Aによる分割パターンと評定者Bによる分割パターンが、ある有意水準において「違うパターンとはいえない」といった統計的検定も近い将来に可能となるだろう。（補遺を参照）

3. 要約モデルから解釈モデルへの展開について

1) 要約モデルの終点

カードから自己組織的にグループ生成が行われていくとき、最初の1~2段階での「関連性」とは、カードとカードの記述内容の「類似性」（の内的な）評定に始まり、カードグループ相互の記述内容を比較して内容的な「類似性」に基づいて行われることになる。そして、記述内容の類似性によって相互的な関係が把握されることから、カードやカードグループの全体構造は、結果的にいずれかがいずれかを含むという包含関係あるいは半順序集合である「束 lattice」として得られる。このため、図形的には形式概念解析によって出力されるハッセ図のような構造、あるいはクラスター分析によるような簡単な構造の樹状図、あるいは集合の重なりを表示するベン図（Venn 図）形式をとる場合もある。カードとカードグループのこうした布置は、従来の KJ 法と比較するとかなり簡素な構造になっていて、その理由は「類」と「種」の相互関係による提喩の説明でも明らかなように、カードやカードグループの包含関係あるいは下位グループ・上位グループによる「上下」関係といった、カードとカードグループの序列にのみ注意を払っていることによる。したがって、KH 法におけるカードグループの空間的な構造は、その表現方法の如何を問わず、もっぱらカードやカードグループの記述内容についての包含関係を表現し、言語的資料の中に現れている記述内容をそのような包含関係として集約して示すという「要約」のための方法となっているといえる。そのようにして得られた「要約」とは、したがって、研究者によってそのように集約されたという意味で一つの「要約モデル」の提示であると考えられる。

さて、KH 法についてここに至るまでに示された解説のほとんどが「要約モデル」を生成する方法についての記述であった。どのような言語的資料も、個々の研究者の経験や観点によって様々に異なって観点から理解されるため、そこから得られる「要約」が同一になることは考えられないことから、これまでに研究者、対象者、研究資料の「単数性」「複数性」に基づいて「第一形式」研究形態から「第四形式」研究形態までを識別し、具体的な研究の進め方を提示してきた。それによって、「要約」の絶対的な同一性を主張するのではなく、そうした実際的方法を通じてより妥当性の高い「要約モデル」を適切に導出することを目指してきた。そのようにして得られた「要約モデル」についての吟味に引き続いて、その次の段階である「仮説提示」すなわち「解釈モデル」の生成について述べていくことにする。

2) 仮説を提起する「解釈モデル」

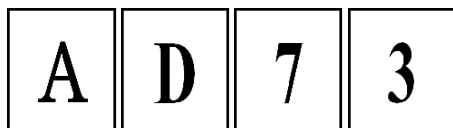
すでに述べたように、「カード布置」の過程において「最終ラベル」が得られる段階に至ると、カードグループはすでにそれぞれ内容の異なる独自のものになっているため、そこから先は「類似性」という概念だけでは集約が行えない状態に立ち至る。特に、元の言語的資料が簡単な質問に対する多様な回答などから成り立っているようなものであれば、「要約」は数十にもなるような要因や要素を含む、内容の異なる相当数のカードグループから構成されている場合も考えられるため、「類似性」という規準だけではそれ以上に集約が進むことは困難なことが多い。そうした場合は、ここに述べる意味での「仮説」や「解釈モデル」の生成という段階に進むほど集約が十分に進んでいないと考えられる。

さて、「仮説」及び「解釈モデル」の生成という KH 法の第五局面へと向かう必要があるのは、「最終ラベル」として得られた内容の間に何らかの意味でのつながりが認められ、そうした関係をさらに分析していく必要がある場合である。特に、元の言語的資料が研究テーマについての様々な思いを含む重層的な内容であったならば、「要約」にはすでに多様な事柄が盛り込まれているから、カードグループ間の単なる「類似性」だけではそれ以上に集約することが困難な程度にまで異なっていることになる。したがって、おおむね「最終ラベル」が得られるこの段階で「要約」という過程は終わりを告げ、「解釈モデル」の導出という次の段階に向かうことになる。

さて、「仮説」を導出するということは、「最終ラベル」として見いだされた複数の事柄の間に何らかの「関係」を指摘するという、研究者による主体的な介入によって行われる過程である。具体的には、すでに述べた内容を再掲しておく、a) 事柄の因果関係や帰属関係によって成り立つところの「推移性」(たとえば「XなのでY」「XのせいでY」)、b) 事柄相互が対照されて際だったり連動していることによって見いだされる「連動性」(たとえば「XであることはY」)、c) 事柄の成否に関わる前提条件や付帯的状况などによる「限定性」(たとえば「Xという状況ではY」)、あるいはd) 対比性(たとえば「XなのにY」)といった相互的な連関を最終ラベルの間に想定することによる。このことを「仮説」及び「解釈モデル」の提示といい、これによって「カード布置」を経てきた元の言語的資料についての理解図式を提起することに至るのである。なお、こうした理解図式は、二つのカードグループ間についての「一つの仮説」である場合から、いくつかのグループをまとめて、全体的な構成内容を対象として提起される場合も考えられる。

3) 仮説の「対偶」と「質的な仮説」の位置づけ

J. St. B. T. Evans (1989, p.53-60)³²⁾は、人間の論理的思考に関わる認知心理学的研究の例として、P. C. Wason (1966) による「カード問題」を提示し、そうした簡単な実験課題でも論理的な推論は容易ではないことを指摘している。「カード問題」とは、「片面にアルファベット



仮説証明：Wasonのカード問題

「アルファベット面がA」ならば「裏の数字面は3」を確認するにはどのカードをひっくり返してみるべきか…。

が一文字書かれ、その裏側に数字一文字が書かれているカード」について、仮に「片面がAならば裏面は3である」という命題があったとしたら、これを確認するにはどのカードをひっくり返してみるべきか、という設問である。「Aならば3」を確認するため、まずは「Aカード」をひっくり返してみてもそのことを確認するというのはよくある選択である。それに続いて、大多数の人は「3カード」をひっくり返してみるという選択を行うのだが、ここが論理的には不要である。つまり、仮に「3カード」の反対が「B」となっていたとしても「Aならば3」という命題の証明と「Bならば3」という事柄は無関係である。というのは、「Aならばその反対面は3である」とは言っているが、「数字面が3であるのはAであるときに限る」とは言っていないからである。つまり、命題の「逆は真なり」というのは主観的な拡大解釈であって、「3カード」をひっくり返して、反対面のアルファベットを確認してもそれは証明されるべき命題とは関係がないためである。ここで論理的に正しい選択は、「Aならば3」であるという命題の対偶をとって「3でないならばAではない」ということを確認することである。したがって、「3ではないカード」である「7カード」をひっくり返さなくてはならない。「7カード」の反対側が「A」以外であれば命題は確認されるが、「A」となっていたならば、「Aなのに反対側は7だった！」して、最初の命題は否定されることになる。つまり、「アルファベット面がAであること」を命題Pとして、「数字面が3であること」を命題Qとすると、「 $P \Rightarrow Q$ 」という関係を確認するためには、その対偶である「 $\neg Q \Rightarrow \neg P$ 」（ \neg は否定を意味する）が成立していなければならないからである。

さて、こうした初歩的な問題をあえて示したのは、命題の証明について基本的な了解を共有するためである。統計学的な発想は、「Aならば3である」という命題を証明するためには、「Aカード」のみに注目してその反対側の数字がどうなっているのかを可能な限り多くのカードについて調べてみることによって、「これだけたくさん調べてそうなのだから、そうなのだ」という帰納的推論によって「Aなので3」ということが確認されたとする考え方である。しかし、一つでも成り立たない事例があればそうした命題が破綻すること、また、ありとあらゆる場合を調べ尽くすことができない事態があること、そしてさらに個別事例から一般命題への移行ということが本質的に飛躍であるとして帰納推論自体を否定したのがK. R. ポパーの考え方であった。

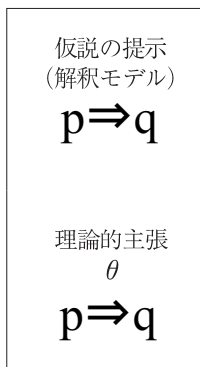
質的アプローチに基づく研究においても、こうした考え方によって「事柄Pならば事柄Qで

ある」すなわち「 $p \Rightarrow q$ 」となっている事実を事例に基づいて確認しようとするが、しかし、対偶を確認するという発想は同様に欠けており、そうした確認を行おうとする研究を見かけることはない。といっても、質的アプローチが証明に関わる論理性を欠いていると主張するものではなく、命題の真偽を確認するというような形での研究形態ではないことを明確に指摘することが目的である。すなわち、質的研究においては、「 $p \Rightarrow q$ 」ということだけではなく、事実上、「 $p \Rightarrow \neg q$ 」というように背反する二つの命題が起こりうる事態を想定しなければならないためである。つまり、状況によっては「 $p \Rightarrow q$ 」であったり「 $p \Rightarrow \neg q$ 」であったりするというそうした状況と組み合わせた形で、とりあえず「 $p \Rightarrow q$ となる世界」を取り出して、その内容を探求するという構成になっているからである。つまり、葛西（2005）のいう「モデルの多重併存状態」とは、そうした意味での「世界」の「多重併存状態」を指し示しており、さしあたり「 $p \Rightarrow q$ 」というように限定された領域に限って、そうした事態における理解と知識を深めることが研究の目的となっていると理解しなければならない。そのような理解にたつことによって、論証には必要不可欠であるはずの「対偶」的証明が行われていない事情が了解される。つまり、「仮説」と「解釈モデル」とは、いずれもその論理的正当性を「一般的に」確認するためのものというよりも、たとえば「 $p \Rightarrow q$ 」という仮説の形式で表すならば、そのようにして切り出された「世界」を対象として、そこに関わる要因や事柄や条件や状況を把握して、そのようにして把握された状況の下ではそのような「 $p \Rightarrow q$ という世界」が成立していることを指摘するのに留まるものといえる。そうした p と q との関係を、「カード布置」における「最終ラベル」として得られた事柄の中に研究者が見いだして指摘することを、KH法では「仮説」および「解釈モデル」の提示と呼んでいる。

4) 「解釈モデル」を裏付けるための「理論」の提起

「データに基づく理論化 Grounded Theory on data」というGTAにおける理論という言葉と、KH法における「理論」の定義が異なるため、以下に相違点を明示しておくことにする。すなわち、KH法では、「要約」「解釈」「理論」を明確に分離し、それぞれを個別の作業過程を経て到達される事柄として位置づけている。すなわち、a)「要約」とは、「カード布置」の過程を通じて「最終ラベル」を得てくること、b)「解釈」とは、「最終ラベル」として得られた事柄について、それらの相互的關係について何らかの「仮説」を立てることであり、得られたモデルを「解釈モデル」と呼ぶこと、c)「理論」とは、そうした「解釈」を妥当なものとして主張する理由や根拠や事物の構造に関わる考え方であり、それを示すこと、である。

たとえば「事柄 p ならば事柄 q 」といったような「仮説」を提示するには、そのように考えるべきであるという「解釈モデル」が根底に置かれているものと考えられる。したがって、ある「解釈モデル」に基づいて「事柄 $p \Rightarrow$ 事柄 q 」という仮説を立てるのはそれ自身は自明のことではなく、研究者によって焦点化された一つの主張であり、元の言語的資料を理解するために提出



された研究者としての態度表明ともいえるだろう。

次に、ある特定の「仮説」「解釈モデル」は何故どのように選ばれてくるのを考えてみると、その背景に「理論」という名称で呼ばれるべき、ひとまとまりの主張が存在していることに気がつく。つまり、ある「理論 θ 」を考えることにより、「事柄 P ならば事柄 Q となる」という「仮説」「解釈モデル」が得られるから、それを言い換えて、「理論 θ 」に基づく演繹的推論によって、「事柄 $P \Rightarrow$ 事柄 Q 」という解釈モデルが建てられ、それが「仮説」として提起されていることになる。これをたとえば「理論 θ の下で ($P \Rightarrow Q$)」というように表記する。

このことを具体的に示すために、例えば、統合失調症の発症に関わる、G.ベイトソンの「ダブルバインド理論」を説明原理 θ として取り上げてみる。仮に「Mr. Xはダブルバインド的コミュニケーションの凄まじい家庭で育った」という「事柄 P 」が確認されるならば、「理論 θ 」の元では、「事柄 $P \Rightarrow$ 事柄 Q 」という推論に基づいて、「Mr. Xは統合失調の心理的破綻に見舞われる可能性がある」という「事柄 Q 」が懸念されることになる。あるいは、「アルコール依存者にはそうした依存を助長するような役割をしている人が存在する」といった共依存的に関わるような理論 θ を考えるならば、「事柄 P 」が「Mr. Xはアルコール依存である」ということならば、「それを依存助長するような人が存在する」という「事柄 Q 」が成り立つことを推論して、事柄 Q に該当するような関係者を想定するという展開も考えられる。

ところで、こうした演繹的推論の元となるべき「理論」がまだ見つけられていなかった場合はどのようになるだろうか。その場合は、まず「事柄 $P \Rightarrow$ 事柄 Q 」という二つの事柄の結びつきを研究の中で見つけ出すことが出発点となるだろう。しかし、その場合、「事柄 $P \Rightarrow$ 事柄 Q 」ということに関わって、意味的に異なる二つの状況があるのでその二つを厳密に区別しておかなければならない。

一つは、「仮説」や「解釈モデル」という段階に入る以前のことであり、「要約」の最終ラベルの中に「事柄 P なので事柄 Q である」という意味内容をもつ記述やラベルが発言としてすでに含まれていた場合である。つまり、「カード布置」の過程でそのようなラベルによって表されるような発言が集約されて「最終ラベル」として得られていたというときである。その場合、「 $p \Rightarrow q$ 」という内容は単に対象者の発言の集約に過ぎないので、それ自体は理論という位置づけにはないことに注意する必要がある。GTA的なアプローチによる初歩的な研究の中には、KH法でいうところの「要約」に含まれているに過ぎないそうした事柄をそのまま「理論」として提示するような場合が散見されるが、すでに述べたようにKH法では「理論とは、そうした解釈を妥当なものとして主張する理由や根拠や事物の構造に関わる考え方であり、それを示すこと」と位置づけているため、そうした内容をもたない限り「理論」とは呼ばない。

仮説に関わるもう一つの事態は、「要約」の中に在る事柄の間に何らかの関係を見立ててそ

それを「仮説」として提示するということである。研究者がそうした仮説を主張しようと意図するならば、そうした関係が成立するための前提条件や状況や事物の構造などを述べて、確かにそうした関係が得られることを、新たな「理論」として提示するという展開が考えられる。そのとき、「カード布置」の中に「事柄Pなので事柄Qである」という趣旨のラベルが仮に含まれていた場合、そうした事実はそのような「仮説」を支持する一事例という位置づけのものとなる。もちろん、その一事例を指摘することによって「仮説」及び仮説を提起する根拠としての「理論」が証明されたと主張できないことはいうまでもない。このように、KH法では「理論」という術語は限定的な意味で用いられるから、GTAなどにおける定義とは明確に異なるものとなる。なお、「事柄Pなので事柄Q」となるような状況や構造を考え出すことにより暫定的な理論 θ を得る際には、葛西(2005)が示しているように、アブダクション(abduction)による推論が重要な役割を担っていることをあらためて指摘しておく。

IV. モデルの内的妥当性及び外的妥当性の確認について

モデルの内的妥当性(intra-model validity)とは、モデルそれ自体が備えているべき妥当性のことであり、ここでは自己妥当性、内部整合妥当性、状況限定的妥当性、専門領域内妥当性という四つの性質をとりあげている。また、質的モデルの外的妥当性(external validity)とは、モデルが指し示している内容が実際の状況とどの程度、良好に対応しているかによって判定されるものである。

1) 自己妥当性

どのようなモデルであっても、そのようなモデルに該当するような事例や場合が原理的に考えられるのであれば、そうしたモデルを排除することなく受け入れることを考えてみる。「風が吹くと桶屋が儲かる」ということや、「天地が崩れ落ちる」と憂えたという杞の国の人の逸話(杞憂)は、常識的にも確率的にもあり得ないと判断されうるにしても、そうした可能性の低そうなモデルを排除することなく一定の地位を与えることを目的として、そうしたモデルには「自己妥当性」が備わっていると考えることにする。たとえば、あり得ないと考えられていた事柄の一例として、開発当初、原子力発電所の事故の可能性は「数万年に一回」といったように喧伝されていたが、実際にはアメリカ・スリーマイル島での炉心溶融事故に引き続き、チェルノブイリ原発の炉心爆発事故はわずかに10年程度の間隔で起きているため、「まさか」とか「そのようなことはあり得ない」という感覚によってモデルの可否を即断することを避ける仕組みが必要なためである。特に、極めて独創的で創造的な考え方は、独創的でも創造的でもない多数者による一般的な見方によって「あり得ない」と無視ないし否定される歴史的事実があることを憂慮してのことである。ひるがえって、質的アプローチとは必ずしも多数回や多人数を対

象とした研究ではなく、ある特定の「その人」や「その状況」という限定的な場面での研究であることが多く、必ずしも「一般に」「頻繁に」「平均的に」起きるわけではない現象を扱うことから、ここで定義するところの「自己妥当性」という位置づけを与えて、議論の対象となるべきことを明らかにする必要がある。

2) 内部整合妥当性

どのようなモデルでも、その中に盛り込まれている事柄が全体として一貫性や整合性を備えていることはモデルとして必須の条件と考えられる。もちろん、ありとあらゆる場合に備えたようなモデルは実際には生成不可能であるにしても、そのモデルが描き出そうとしている中心テーマに関しては、全体として一貫性があり整合的であることは当然のことといえる。特に、研究過程において提起されるモデルが、そうした意味での一貫性や整合性をもたずに内的に破綻しているようであれば提起されるはずはないことから、一定程度の内部整合妥当性を備えているといえるだろう。

3) 状況限定的妥当性

モデルとは極めて限定された特定の状況だったりあるいはもう少し一般的な状況などにおいて、事柄や物事のあり方・関わり方についての「模式図」である。どのようなモデルであっても、「そのモデルが前提としている状況」における模式図なのであって、ありとあらゆる場面や状況を網羅することはできない。したがって、モデルはその設定時において、そのモデルが対象としている状況や物事がどういうことであるのかを述べて、そのモデルが適用される状況の範囲を明示する必要があるとともに、どのようなモデルも「状況限定的な意味での妥当性」を主張するのに留まるものとなる。

統計的アプローチにおいても、学生をサンプルとして調べた結果をそのまま高齢者や幼児を含む「一般」へと適応することが誤りであるように、どのような分析結果もどのようなモデルも、限定された状況においてのみその妥当性を主張し、そうした限定された状況においてのみその妥当性の検討が行われることになる。統計的有意性検定によって「有意」となった結果についても、そうした結果はどのような母集団に関する結果なのかについて、状況限定的にその妥当性の領域を認識する必要があることはいうまでもない。

4) 専門領域内妥当性

研究とは何らかの専門研究者集団 (disciplinary matrix) によって社会的に担われる。しかし、天動説から地動説へという不連続で断絶的な理論移行が起きたという科学史上の歴史的事実 (T. S. クーン, 1962)³³⁾ から明らかなように、どのような研究であってもその妥当性の判断を、現行の専門研究者集団という現実の研究者群のみを前提として行うわけにはいかない。なぜなら、

旧来の理論と新理論との間に連続性がない場合には、旧陣営は旧理論の立場に留まっていて、新理論を受け入れるために必要な前提や視点を導入できない場合が想定されるためである。ここでいう「専門領域内妥当性」とは、したがって、専門家集団という外的な社会的グループのみを対象とするのではなく、そこから派生するところの「研究者の内面にのみ存在する、内在化された専門家集団」という視点を含まざるを得ない。そして、「実際の専門家集団」と同時に「理念的専門家集団」という、二つの観点から判断されるモデルの妥当性を「専門領域内妥当性」と呼んで新たに位置づけることにする。なお、研究者はおおむね、大学や大学院、研究所といったような社会的施設などの物的人的環境において研鑽を積む中で、外在する専門家集団とは別に、自らのうちに「理念的専門家集団」を内在化していくという過程をたどるものと考えられる。

5) 外的妥当性

外的な妥当性とは、モデルそのものの妥当性ではなく、そのモデルが描き出している人々や物事や現象について、そのモデルによって指し示されている外的事実との対応において判断されるモデル的的確性を指す。このことを「要約モデル」「解釈モデル」「理論」の三つの事柄について順に吟味していくことにする。なお、外的妥当性を数量的に確認していくためには統計的手法を用いることが考えられるが、そうした手順は統計学や多変量解析による通常的分析となるのでここでは特にふれない。

まず、KH法の「カード布置」過程から得られる「要約モデル」の外的妥当性とは、様々な異なった内容として読まれうる多様性に満ちた言語的資料について、「カード布置」を経て得られた「要約」が複数の専門家の間でどの程度一致しているかの判定に関わることである。KH法では、このことを確認するために、「複数者」「複数資料」という事柄に基づいて第一形式から第四形式までの研究形態を提示し、それぞれの研究形態においてどのように分析を行い結果の統合化をはかっていくかを述べてきた。そうした研究形態に基づくことによって、「要約」およびそのようなこととして提示する「要約モデル」の外的妥当性を確認するための根拠は明らかとなっている。なお、現状ではそうした外的妥当性の度合いを簡便に数量的に示すには至っていないので、そうした指標化を今後進めていく必要があるだろう。その際、すでに示したように、カードのグループ分けにおける「大域的安定性」の判定は、「要約モデル」の研究者間での一致度を示す指標として期待できるものである。

次に、「仮説」及び「解釈モデル」の外的妥当性とは、「事柄Pならば事柄Qである」すなわち「 $P \Rightarrow Q$ 」というような物事の結びつきに関わる「仮説」が、資料や調査などからどの程度の割合や頻度や数量として確認できるのかによって判定される妥当性を指す。通常は、数多くの資料を調べてその中に「 $P \Rightarrow Q$ 」であるという事実がどの程度存在するのかを確認するという作業によって判定されることになる。なお、「要約モデル」の中に、たまたま、そうした内

容に合致するラベルが確認された場合、そうした事実も「仮説」を支持する一つの根拠となるにしても、どの程度の頻度で確認されるべきかについての基準は原理的に存在しない。（なお、括弧付きの「仮説」という語は、KH法における分析手法を通じて得られた操作的な定義に基づくところの仮説の意味で用いている。）

なお、GTAの方法に基づく質的研究においては、そうした確認を得るためには少なくとも10数例から20数例程度を対象とした研究によるべきと言われることがあるにしても、あくまでも経験的な理解であって特に厳密な根拠があるわけではない。GTAでは、こうした外的妥当性に関する議論を「トライアングレーション triangulation」という術語によって捉えていて、複数人・複数資料に基づくことで「三角測量」的に研究の妥当性を高めることを説いている。しかし、ここで注意しなければならないのは、GTAでは研究のそうした複数性によって、何についての妥当性を高めようとしているのかについて曖昧な部分が多いことである。それは、研究そのものが、a) 妥当な仮説を提起しようとしているのか、b) 仮説の妥当性を証明しようとしているのかについては、GTAの分析方法としての特徴から、そうした分離が明確ではないことに起因する。妥当な仮説を提起するという前者であれば、複数資料内にその仮説に合致する事実をある程度見いだすことができればそれなりに目的は達成されるが、しかし、そのことによって、その仮説の妥当性が証明されたと主張することはできない。なぜなら、そうした仮説がどのような状況でどの程度確認されるのかという、外的事実との突き合わせによってのみ「外的妥当性」の検証が可能なのであって、仮説の生成に用いた資料をそのまま二重に利用して当の仮説の妥当性を同時に主張するのは、用いた資料とモデルの相互循環的な意味での内的な妥当性の確認にしかないからである。言い換えれば、資料の中から得られた仮説とは、その資料を説明し読み解くものとして生成されてきたはずなので、当然ながらその仮説によってその資料が読み解けるため、その仮説の外的な妥当性を確認するためには、その仮説の生成に関わっていない別の資料との対比が欠かせないからである。GTAでは、用いる資料と仮説生成の間にこうした相互循環的な過程を取り入れているが、そうした過程もあくまでも内的妥当性の循環的な向上に留まると考えるべきであろう。なお、GTAの方法では、循環的とはいえ複数の資料との対比によって仮説生成を行おうしていることは確かなので、そうした事情を斟酌するならば「GTAでの仮説は初期段階の外的妥当性を備えている」と表現することは可能と思われる。

次に、理論の外的妥当性とは、一般的に、その理論が提起する理解図式という演繹的推論がどの程度実際に確認されるかという検証によって判定されるものと考えられる。「事柄P⇒事柄Q」という仮説とは、そうした関係性を成立させる根拠に関わるなんらかの理論 θ という観点によって、そのように予測され期待される一つの事例という位置づけにある。したがって、理論の外的妥当性とは、そうした事例群においてどの程度そうした予測や期待が確認されたか否かによって判定されることになる。ここで理論の外的妥当性の確認と仮説の外的妥当性の確

認との違いをあらためて示すならば、仮説の外的妥当性の判定とは「事柄Pならば事柄Q」という仮説に合致する事例がどの程度確認されるかに関わるのに対して、理論の外的妥当性の判定とは、事柄Pと意味的に等価とされる事柄rに対して、事柄Qと意味的に等価とされる事柄sを突きあわせ、「事柄r⇒事柄s」といったように意味的に拡張された事例群を対象としているという違いがある。つまり、理論の外的妥当性の判定とは、いわゆる仮説演繹法「hypothetico-deductive reasoning」という方法によるものと同一の考え方となる。

具体例を示すならば、たとえば、子どもを病気で亡くした母親の悲嘆が長く続くという「悲嘆の遷延化」についての質的研究(畑野,2006)³⁴⁾において、たとえば「(ある状況に至ったのに) P⇒(悲嘆はなくなる) Q」といういわば対比的な仮説は聞き取りの中で何度も確認がなされ、その状況そのものにも様々なものがあり、「p1⇒q」「p2⇒q」「p3⇒q」…という状況が見いだされた。それによって、仮説「(ある状況に至ったのに) P⇒(悲嘆はなくなる) Q」の外的妥当性はある程度確認することができた。次に、そうした「P⇒Q」というのは「なぜなのか」という問いかけと疑問に答えるための理解図式たる何らかの理論が求められた。テレンバッハによるメランコリー心性や木村敏によるポスト・フェストゥムの心性などが悲嘆の遷延化の理解図式としても取りあげられたが、それと同時に、社会構築主義の立場から、悲しみを手元に留めておくことによって喪われた子どもとの関係を内面的に維持し、母親という自らの地位を過去形ではなく現在形として生きることが悲しみの遷延化によってもたらされるという一つの理解図式が見いだされた。つまり、悲嘆の遷延化を理解するための構造を与えてくれる暫定的な理論として、自分自身が何者であるかを生成し維持するという「アイデンティティ・ワーク」という一つの説明原理へとたどり着いたことになる。KH法では、そのようにして見いだされた理解図式を「理論」と呼び、当該研究によってその外的妥当性の一端(初期段階の外的妥当性)が示されているという事実をもって、「一つの妥当な理論」として提起することになる。このようにして提起された理論は、その後ひき続く「実証的」研究によって外的妥当性の確認があらためて行われるべきこととなる。

(なお、悲嘆の遷延化を読み解くための「アイデンティティ・ワーク」の「理論」は、そうした過程が対象者の無意識世界においてそのように実態的に進行していることを主張するといった段階のものではなく、さしあたり、悲嘆の遷延化という現象を効果的に理解するための一つの理解図式に過ぎないことを指摘しておく。また、ここでいう「実証的」とは、統計学的検定に基づく数量的研究が原理的暫定性の下にあるという葛西(2006)の理解に基づくものである。)

文 献

- 1) 木下康仁『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂, 2003
- 2) W. Labov, & J. Waletzky "Narrative Analysis: Oral Versions of Personal Experience", Essays on the Verbal and Visual Arts, by Helm, June (ed), Americal Ethnological Society, 1967
- 3) 桜井厚『インタビューの社会学 ライフストーリーの効き方』せりか書房2002

- 4) 葛西俊治「解釈的心理学研究における理論的基盤とアブダクションに基づくモデル構成法」札幌学院大学人文学会紀要, 第78号, pp.1-26, 2005
- 5) 竹田青嗣『言語的思考へ 脱構築と現象学』径書房, 2001
- 6) 佐藤信夫『意味の弾性 レトリックの意味論へ』岩波書店, 1986
- 7) Michael Murray and Kerry Chamberlain, "Qualitative Health Psychology Theories and Methods", p.218-219, SAGE Publications, 1999
- 8) 葛西俊治「心理学的研究における統計的有意性検定の適用限界」札幌学院大学人文学会紀要 第79号, pp.45-78, 2006
- 9) 川喜田二郎『発想法 創造性開発のために』中公新書, 1967
- 10) 川喜田二郎『続・発想法 KJ法の応用と展開』中公新書, 1969
- 11) 林知己夫『数量化の方法』東洋経済新報社, 1974
- 12) 竹内啓・柳井晴夫『多変量解析の基礎 線形空間への射影による方法』東洋経済新報社, 1972
- 13) 長田博泰「形式概念もとづく質的分析」『社会情報』（札幌学院大学）14巻1号, 19-37, 2004
- 14) 長田博泰「社会情報解析への一寄与：形式概念によるデータ解析」『社会情報』（札幌学院大学）15巻2号, 103-118, 2006
- 15) 長田博泰「形式概念を用いたデータ解析：幼児発達行動の分析」札幌学院大学社会情報学研究, 71-81, 2007
- 16) 『オートポイエーシス 生命システムとはなにか』H.R.マトゥラーナ, F.J.ヴァレラ, 河本英夫訳, 国文社, 1991
- 17) 木村敏『自己・あいだ・時間 現象学的精神病理学』弘文堂, 1981
- 18) 土居健郎『甘えの構造』弘文堂, 1971
- 19) B.L.ウォーフ『言語・思考・現実』池上嘉彦訳, 弘文堂, 1978
- 20) R.E.ニスベット『木を見る西洋人 森を見る東洋人—思考の違いはいかにして生まれるか』村本由紀子訳, ダイヤモンド社, 2004
- 21) 瀬戸賢一「意味拡張におけるメトニミーの位置づけ」筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究成果報告書, 2001
- 22) "Metonymic polysemy and its place in meaning extension" Ken-ich, Seto, p195-214, Polysemy収録, 2003
- 23) 佐藤信夫『レトリック感覚』p.155, 講談社, 1978
- 24) G.A.Miller "The Magical Number Seven, Plus or Minus Two: Some limits on our capacity for processing information, Psychological Review, 63, 1956
- 25) 内藤哲雄『PAC分析実施法入門：「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版, 1997
- 26) 山崎菜穂「中学教師と臨床心理士の子どもの援助様式についての考察—8名のインタビューによる事例研究的アプローチ」札幌学院大学臨床心理学研究科修士論文, 2005（未刊）
- 27) 川喜田二郎・牧島信一『問題解決学 KJ法ワークブック』講談社, 1960
- 28) 市川亀久彌『創造工学 等価変換創造理論の技術開発分野への導入とその成果』ラティス刊, 1977
- 29) A.シュッツ『現象学的社会学』川真規雄・浜日出夫訳, 紀伊國屋書店, 1980
- 30) 木村敏『分裂病と他者』弘文堂, 1990
- 31) S.アリエティ『創造力 原初からの統合』加藤正明・清水博之訳, 新曜社, 1980
- 32) J. ST. B. T. Evans "Bias in Human Reasoning: Causes and Consequences" Lawrence Erlbaum Associates, 1989
- 33) T. S.クーン『科学的革命の構造』中山茂訳, みすず書房, 1962
- 34) 畑野美智子「子どもを亡くした母親の悲嘆に関する研究 中年期に一人しかいない子どもを小児がんで亡くした母親との面接を通じて」札幌学院大学臨床心理学研究科, 2006年度修士論文（未刊）

* 関連性評定質的分析の実際の手順については以下のサイトに解説がある。

<http://ext-web.edu.sgu.ac.jp/kenkyuho/>

補 遺

「第2種Stirling数」とは、 n 個の要素の集合を、互いに素、網羅的、かつ空でない k 個の部分集合に分割

する分け方の数を $S(n, k)$ として、以下の式で計算される。

$$S(n, k) = \frac{1}{k!} \sum_{j=1}^k \binom{k}{j} (-1)^{k-j} j^n$$

これらを合計した分割の総数はBell数と呼ばれ以下の式となる。

$$\sum_{k=1}^n S(n, k)$$

Relatedness Evaluation Qualitative Analysis for Transcript Study
— Its basic ideas and practice —

KASAI, Toshiharu

Abstract

A new qualitative research approach - Relatedness Evaluation Qualitative Analysis - for transcript study was offered with theoretical considerations and practical techniques. The KH Method (Kanrensei Hyoutei; Relatedness Evaluation), utilizes and combines three distinct techniques originated or developed by Japanese researchers such as 1) KJ Method by Jiro Kawakita, anthropologist, for constructing a summarized label structure of transcript contents, 2) Quantification Theory by Chikio Hayashi to find a multi dimensional scaling from a correspondent table of summarized labels obtained by KJ Method, and 3) Formal Concept Analysis programmed by Hiroyasu Nagata to yield a Hasse diagram to show the structure of the labels.

The characteristic points of KH Method in comparison with Grounded Theory Analysis (GTA) and Interpretative Phenomenological Analysis (IPA) are as follows: 1) KH Method arranged KJ Method and enabled both numerical and logical structural analyses for more valid interpretational process of transcript. 2) When external criterion variables of each speaker for each transcript are obtained, KH Method integrates quantitative and qualitative approach by enabling categorical multi regression analysis or categorical discriminant analysis by using Hayashi's Quantification Theory Analysis (type I or II). 3) KH Method separates a transcript basically into sentences, which are written on separated cards for card-group making in terms of relatedness of their contents. Autopoietic nature of the card-group formation and its labeling process with less abstractive labels are different from GTA/IPA's rather abstractive way of coding. 4) KH Method takes account of plurality/singularity of respondent/transcript/researcher and prepares four types of research format to integrate plural results.

Discussions were made about autopoietic process of KJ and KH Method and its cultural aspect in terms of linguistic relativity, also about significance of labeling process using synecdoche, a figurative expression between class and member.

Keywords: qualitative analysis, transcript, relatedness, quantification theory, formal concept analysis, autopoietic, KJ Method, grounded theory, interpretative phenomenological analysis, synecdoche, interpretative model

(かさい としはる 本学人文学部教授 臨床心理学科所属)